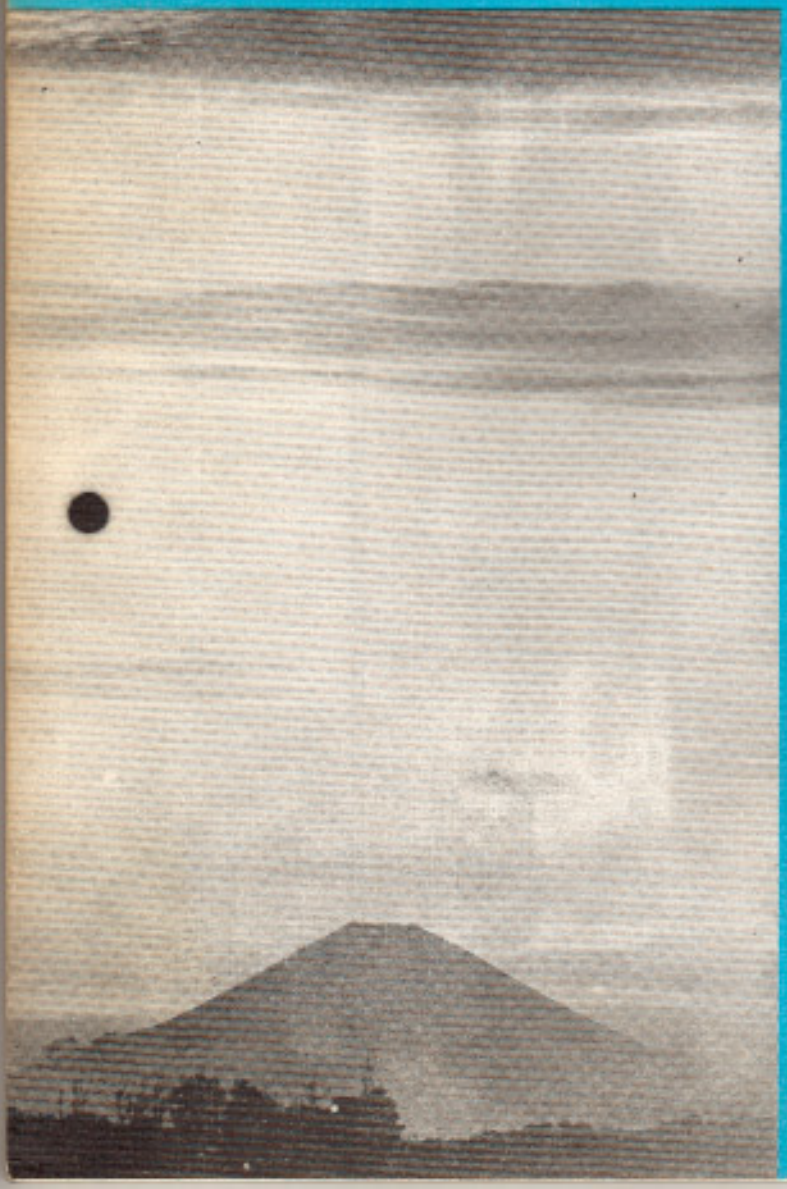
●UFOと宇宙哲学の研究誌●

GAPニューズレター 52



GAPニューズレター第52号目次

ホワイトサンズ事件（完）…… ダニエル・フライ　1
生きるための助言（4）……J・クリシュナムルティー　9
多条光線を放つ円盤…… ゴードン・クレイトン　13
<GAP哲学研究講座>意識と惑星と人間(2)…久保田八郎　21
<改訳>空飛ぶ円盤同乗記（5）…… G・アダムスキー　26
科学トピックス……　41
「声」……　42
益田工業高校記念祭でスライド映写，大好評……　47
UFOスライド，各地の学校で映写，好評……　48
三浦半島の円盤……　48
昭和47年度日本GAP総会，盛況 ……　49
71回に及ぶ大阪支部例会……　51
月例研究会案内……　51
<写真>香川県のUFO ……　53

☆表紙写真は編者（久保田）撮影の三浦半島の円盤。詳細は四十八ページ。

GAPとは

GAPは「知らせる運動」という意味の世界的なグループ活動で，世界中の人々が空飛ぶ円盤の真相について"知る"機会を与えられるべきであるという見地に基ずいて1959年にジョージ・アダムスキーによって創始されました．彼の願いは「最大多数の人が現代の真実を発見して，来たるべき時代に眼を転じること，人間はすべて"コズミック・パワー"の御子であり，そのパワーの諸法則が宇宙に遍満している事実を確信をもって知ること」にありました．この諸法則は他の世界（惑星）から来る友好的な訪問者からもたらされた"生命の科学"の研究と理解を通じて体得できるものです．

日本GAPの目的は円盤とスペースブラザーズ問題を関心ある人々に伝えることにあり，奉仕活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります．その中心思想は次のとおりです．

1．この太陽系の他の惑星群から偉大な発達をとげた人類が地球を訪問しつつある．
2．他の世界から来る人々はこの世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト（接触）しており，危機にひんした地球に対して救援の手をさしのべている．官民を問わずスペースブラザーズとコンタクトしている人々が少数存在すると思われるが，通常その真相は洩らされていない．
3．ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は，人類の起源と未来の運命の真実を知るのに有益である．

本誌は他の団体・個人と対立するものではなく，政治・宗教と関係のない非営利刊行物です．本誌が読者に対して多少とも役立てば幸いです．

◎GAP参加グループを有する国は次のとおりです．
アメリカ，オーストラリア，ベルギー，ブラジル，カナダ，デンマーク，イングランド，フィンランド，ドイツ，オランダ，インドネシア，日本，メキシコ，ノルウェー，スエーデン，スイス（ABCの順．1971年6月現在）

☆本誌掲載記事はすべて翻訳転載権取得済。禁無断転載。

ホワイトサンズ事件

ダニエル・フライ

（完）

円盤の推進法を説明する宇宙人は、
テレパシーで船内の細部を見せる！
しかも彼らの祖先に関する驚くべき
秘密を洩らす……

君たちの科学の急速な進歩に対する根本的な障害の一つは、科学者たちが物質とエネルギーの簡単な同一性をまだ十分に把握していないことだ。地球の最大の思索家の一人であるアルバート・アインシュタイン教授はずっと以前に物質とエネルギーの同一性を量的にあらわした数式を発表した。この式は数学的にはまったく正しいのだけれども、誤った結論に達している。つまり物質はエネルギーに転換するし、その逆にもなるというのだ。しかしほんとうは物質もエネルギーも一つの実体の異なる面にすぎないのだ。

二つの次元を持つ幾何的な平面を考えてみたまえ。この面が君の視線に対して直角をなすとき、君はそれを平面と感じる。これはその実体の物質面をあらわす。次に君がその面を九十度ほど回転させると、その面は君の視界から消えて一次元のみとなる。これはその実体のエネルギー面だ。君はその面をとり変えたわけではない。ただ観点を変えただけだ。技術的に言えば関係位置を変えたのだ。一定の物体に含まれていると思われるエネルギーの量は、一定の観測者にとって質量エネルギー軸を中心にそれがどれくらい回転したかにかかっているのだ。別な関係位置から同じ物体を見ている別な観測者は、まったく異なる量のエネルギーを見るだろう。宇宙空間を進行している二個の惑星のそれぞれに一人ずつ観測者がいると仮定しよう。この惑星はいわば光速の半分の速度で動いているとする。しかしどれも等速度で平行に進行しているのだ。もし宇宙空間に他の天体が存在しないとすれば、二人の観測者は当然のことながら自分たちの惑星は運動エネルギーを持たないと考えるだろう。なぜなら二人の関係位置が同じエネルギー・レベルにあるからだ。そこで三番目の惑星を置いたとして、これが空間に静止しているとすれば、二人の観測者は自分たちの惑星が相関的には運動エネルギーを持たないのに、

第三の惑星に関してはすさまじいエネルギーを持っていると感じるだろう。しかし実際にはどの惑星が動いているかを決定する方法はない。ただ惑星間に相対的な運動または異なるエネルギーがあると言えるだけだ。

アインシュタイン博士が抽象的な数学的推理によって明るみに出した別な糸口として次のようなものがある。つまり一物体が速度を増すにつれて、その次元は運動の方向に短縮するというのだ。この物体が光速に達すると運動の方向に次元を帯びることを中止する。これはもちろんその物体が観測者にとって質量エネルギー軸を中心に回転したからであり、やがてそれは物質であることをやめて純粋なエネルギーになってしまったのだ。こうして一グラムの物体を光速にまで加速するには 9×10^{20} エルグのエネルギーを要することがわかる。この速度になればそれは物質であることをやめるので、一定の関係位置にとってはエネルギーの量はその速度をそれ以上増すことはできないことが明らかとなる。

しかし物理の問題についてはまたあとで話す時間があるだろう。今はもともと遊覧旅行なのだから、君に外景の説明をすることにしよう。

北方に見える大きな都市はセントルイスで、前方のひっそりした地平線上の輝きはシンシナティーだ。君は二分間以内でそれを通過するだろう。するとまもなくピッツバーグの町の光が見えるよ。

われわれが英語ばかりでなく地理についてもずいぶん学んだことはわかるだろう。君たちの歴史はわれわれにさほど知られてはいない。君たちの民族は過去に関して多くを考えないからだ。もちろん太古の各文明の歴史は君たちよりもわれわれの方がはるかによく知っているんだがね」

この最後の説明はそのとき私の意識に焼きつかなかった。シンシナティーの燈火が三十五マイル下方の地上で音もなくこちらへ押し寄せて来るのを夢中になって見つめていたからである。

東方への空中旅行のために、月は今や頭上あたりにあるにちがいないことがわかっていたが、地表はその反射光の形跡をほとんど示していなかった。ニューメキシコで上昇したときに見た緑色のリン光はほとんど消えている。私は地表の反射能の測定について聞いたことはなかったが、この高さで暗黒に近いことから判断して、少なくともその地域の反射はきわめて低かったと思う。もちろん私が判断の基準としたのは月光だけであり、また反射能の正確な見積りをするのに地表からあまり離れていなかったのだ。

シンシナティーの燈火は今や大体真下にあった。無数の燈火がひしめいていて、しかも密集しているので、その多くを個々に識別することはできない。なんとか見えたのは或る大きなかがり火である。それは輝く炭層に燃え広がっていて、まるでスポットライトの中の水晶のようにきらめく、すごく明るい光点が二、三ある。

もちろんシンシナティーがこの位置から見える唯一の都市ではない。三十五マイルの高度からは視界がかなり伸びるし、ビューイング・スクリーンの狭い範囲内でも、いつでも同時に文字通り無数のさまざまの大きさの〝燃えさし〟や火花や光点などを見ることができた。それらはすべて人間が居住していること、仕事が行なわれていること、ガイド・ビーコンがあることなどを示していた。

「あと数分間でニューヨーク市の上空へ来るよ」と自分の中で響く声が聞こえてくる。「高度を二十マイルに下げることにしよう。君が乗っている宇宙船は人間輸送用に作られたものではないから（人間用のコンパートメントは緊急時用の設備にすぎない）、われわれの母船でやっているような完全な負の重力補正をする必要があるとは考えられなかったのだ。その結果、下降を始めるにつれて地表の方向に加速されるだろう。

だから君の体重は少しへってくるぞ。そのために気分が悪くなるような加速度を落としてあげよう」

私は少し胃が上がってくるような感じがした。これは速度の遅いエレベーターで下降するときの感じに似ている。ただしこの場合は、この感じは約三十秒続いただけである。すると私の体重はまた正常になった。

「君はあと一分もすれば適当な高度に降りられるような一定の加速度で下降しているのだよ。もちろん進行の安定には正の重力加速度をともなうのだ。しかし君はそれを感じないだろう。君は重力の変化によってさほど困らなかったようだが、地球人はまだ飛行機用のgの補正装置を開発していないから、君はわれわれよりもこんな変化に強いのだろうと思う」

私は答えた。「この程度の変化で私がくたびれると君が思うなら、われわれのローラー・コースターに乗ってみるか、スクァート・ジョブに乗ってアウトサイド・ループでもやってみるといいよ！」

「ちょっと待ってくれ」と相手は答えて「君はわれわれの弱身につけこんでいるようだ。私の英語に対する理解は完全だとうぬぼれていたんだが——。君は意味のわからない言葉を二つほど使ったな。その意味を説明してくれないかね？」

「ローラー・コースターとスクァート・ジョブのことかい？　ローラー・コースターというのはアメリカの遊園地の多くに見られる機械仕掛のことだ。それは乗客用の座席のついた低いオープンカーから成っていて、乗客がつかまるためのハンドレールが取り付けてある。鋼鉄の車輪があって、それが高い鉄骨の上に敷かれた二本の鉄鋼軌道上を走るんだ。乗客が座席にすわると、カーは軌道間の可動チェーンに連結されて、それが最高位置まで引張り上げる。そこからカーはチェーンから切り離されてあとは重量まかせとなる。軌道は急角度で急降下し、やがて地面まで降りて、ふたたび出発地点の高さに急上昇する。こうした急上昇と急降下が何度もくり返される。また急傾斜の短い半径の旋回部分が数カ所あるし、最後には乗客は出発点に帰ってくる。そしてカーはスリルを求める別な乗客と入れかえられるのだ。これに乗って起こる爽快な気分は、重量の急速な変化を感じた脳の反射部分が血液中にアドレナリンを放出することによって起こるんだ。これはもちろん肉体が突然の危険に遭遇したときはいつも起こるんだが、コースターの場合はほんとうの危険はないことがわかっている。そこで乗客は実際の危険にさらされることなしにアドレナリンによってひき起こされる刺激を楽しむことができるんだ。

スクァート・ジョブというのはアメリカの俗語で、ジェット推進飛行機の一つを意味するんだ。君はこれらを研究するのに十分な機会があったはずだから、よく知っていると思うんだがね。アウトサイド・ループというのは飛行法の一つだ。飛行機が垂直面にそって円を描くのだが、そのとき機体の上部が円の外側になるようにするのだ」

「ありがとう」と大将が答えて「君を直接コンタクトの手段として選んだのは間違っていなかったようだ。

君は今二十マイルの高度にいて、ニューヨーク市は眼前に横たわっている。君の円盤は北西側から接近していて、このコースを飛び続けると、やがて市の北東端の海に達するだろう。そこで市を旋回して西方へ進行することになるだろう。と同時に円盤は回転するから、ビューイング・スクリーンはいつも市の中心の方に向けられるはずだ。君の円盤の速度は時速約六百マイルに落とされるから、もっと景色を楽しむ時間が持てるよ」

もし私が作家か詩人であったら、眼前にゆっくりと回っている世界最大の都市として目に映るこの光景について、ちょっとした腕をふるうところだ。だが私は作家でも詩人でもなく、言葉をあまり知らず、貧弱な文章しか書けない単なる技術屋にすぎないので、それを試みることは絶望に近い。二十マイルの高度なら燈火がもっと明るくて、それより高空から見るよりも個々にはっきりと識別できた。これは数個の明るい火花を放つ輝く炭層ではない。それは数百万の青白いダイヤモンドをちりばめた巨大な衣装で、黒いビロードを背景としてきらめいている。眼下の各種の気層の異なる温度は円盤の急速な運動と結びついて、燈火群を激しくきらめかせている。だから市全体が脈動してチラチラ発光する海となっていた。

私は思った。「自分が芸術家なら、これはわが生涯の最大の瞬間となるだろう。だが私の知識欲は純粋に美的な価値の評価を大きく越えているにちがいない。この光景はたしかに美しく、空中旅行は興味あるものだったが、それでも母船に五分間乗ることができればまだその方がよい」

「残念ながらそんな乗船を準備するほどの時間がなかったんだ」と相手は答えた。「だが君はわれわれがまだ地球の大気に順応していないことをおぼえているだろう。しかも君が言ったように、もし君が母船内に乗ったら君はからだと一緒に空気を持ち込むことになるんだ。十分な時間があれば、われわれは地球人が海中へもぐるときに着るような服を準備できたはずだ。そうすれば君は地球の空気もわれわれの空気も変化させないで母船内に乗れるだろう。しかしそれにはかなりの時間を要するだろう。われわれは地球人のように時間のドレイにはならないけれども、それでも自然の異なるエネルギー源から基本的に推進エネルギーを取り出す宇宙船に乗っているし、地球人の船乗りとちょうど同じように、しばしば〝潮流に乗って航行する〟必要があるんだ。

われわれはまもなくこの地域を離れねばならないが、数ヵ月以内に地球へ帰って来るよ。われわれが行っているあいだにわれわれの空気と混ぜるために地球の空気を十分に貯えたんだ。帰って来たらふたたび君とコンタクトしよう」

「だがその頃にはぼくはテスト場にいないだろう」と私は言った。「ここでの仕事は終わって、ぼくはカリフォルニアへ帰らねばならないんだ。ところでぼくは君の名前さえ知らないんだが、君たちは一定の名前を持っているのかね？」

「名前は持っているよ。ただしわれわれのあいだでは名前を使う機会はめったにないんだけどね。もし地球人の一員になるとすれば、アランという名を使うだろう。これは君の国では普通の名前だし、ア・ランという私の名前とほぼ同じだ。君がカリフォルニアへ行く件だが、われわれが帰って来ても君とコンタクトするわれわれの能力にほとんど相違は起こらないだろう。前にも言ったように君の心はうまくキャッチする。実際、君が心のイメージを分析する練習をもう少しやってくれたら、君は母船に乗らなくてもわれわれは母船の細部を君に見せることができたんだがね」

「それはうんとやってみたいね」と私は言った。「向上するのに最良の方法は練習することだ。母船の細部が手始めとしてむつかしすぎれば、ぼくが今乗っている円盤の細部に関して徹底的にぼくをテストしたらどうかね？　もしぼくが目を閉じて精神を統一すれば、少なくともこの円盤の断面を見せることができるんじゃないだろうか」

「まずだめだ」とアランは少々そっけなく答えた。「一般地球人が超感覚的知覚力（ＥＳＰ）と言っている現象を試みようとするときにほとん

どいつもおかしている誤りを君もおかしているのだ。まず第一に、それは全然〝超感覚〟ではないんだ。それは各感覚器官と同様に、肉体の普通の知覚装置の一つとほとんど同じなのだ。ただし地球人はそれを使用しないために、まだ発達の初歩的な段階にある。地球の動物やコン虫の多くは人間よりも高度にこの感覚を発達させているよ。

君は生まれたときから目をあけたままでイメージによる印象をキャッチしたり分析したりすることになれている。君が初めて顕微鏡の使用法を学んだとき、接眼鏡は一つしかなくても両眼を開いたままでのぞく方がよいと教えられた。だから両眼を閉じてはいけないんだ。ビューイング・ビームを切ることにしよう。そうすれば心が乱れるような影響はなくなるだろう。

次に、精神を集中させてはいけない。精神集中は（テレパシーの）送信の態度であって、受信にとってはほぼ完全な障害となる。正しく受信するには完全なリラクセーションの状態に達しなければいけない。君はこれがやれる能力を持っている。地球人の或る種族の中で著しい能力だ。

実際、私が初めて君の心とコンタクトしたのは、この能力によったのだ。それは三夜前だった。君はベッドへ帰ったが、その日の出来事の心痛があまりに大きかったために眠れなかった。君は私にとって非常に興味ある精神的な方法を応用した。その簡単さと効果的な点で興味があったのだ。それをおぼえているかね？」

「おぼえているよ。すぐ寝つかれないときはときどきそれを応用しているんだ。完全な暗黒の部屋のイメージを心に描いて、その部屋のむかい側の壁面に十個の光る数字があるものとする。次に他のあらゆる想念が意識から排除されるまでこれらの数字に自分の注意を集中する。それから十個の数字を一つずつ消してゆきながら残りの数字に心を集中するのだが、一つ消すごとに集中の度合を弱めてゆく。普通ならまだ数個の数字が残っているあいだに眠り込んでしまうんだ。しかしどんな場合でもぼくは最後の数字が消えたあと数秒間もすれば眠り込んでしまう」

「そのとおりだ」とアランが答えて「そしてこの方法は顕在意識をリラックスさせるばかりでなく、他のあらゆる想念を潜在意識の戸棚の中に返らせることになる。こうした状態下では顕在意識がやるよりもはるかに容易に潜在意識は送受信を行なうんだ。

私はそれを認めることを恥ずべきだろうな。だが君の場合は誘惑が大きすぎて抵抗できなかった。人間の心はこれまですみずみまで探知されたことはないだろうが、私は君の心をくまなく探知した。君が自分自身について知っているよりも私は君のことをはるかによく知っていると断言できるだろう。私が君の心の中に見つけたものは望ましいもののすべてではなかった。もちろん君にとって生活はいつもきびしかったし、多くのキズあとや、まだ半分程しか癒されていない二、三のキズあとも見つけた。また、こうした運命との戦いが君に対してうんと大きな知覚力と理解力を与えたこともみつけた。それで君は理想的なコンタクティーになるだろうと思ったんだ。

だがわれわれは手近な計画からそれてしまった。君は君自身の心のリラックス法を応用せよとすすめるつもりだった。今暗くなっているビューイング・スクリーンの部分に目を向けたまえ。そして心がリラックスしたら、君が乗っている円盤の内部のイメージを伝えるようにしてみよう」

暗くされた部屋のイメージを描く必要はなかった。というのは、ビューイング・ビームが切られたために私が乗っている円盤のコンパートメントは完全な暗黒になったからである。私はビューイング・スクリーン

の部分に光る数字のイメージを描くのに困難を感じなかったが、私の意識の端をしつこくたたき続けている多くの疑惑を排除しようとしたとき、実際にはそれが不可能なのを知った。結局私は疑惑を完全に払いのけることをあきらめて、できるだけ遠くの方へ押しやるようにし、数字を消し始めた。習慣の力というものはおそろしく、心の中で数字を消すにつれて心が澄んできたので、最後の数字に達するまでにはほとんど眠りかかっていた。

最後の数字を消してから私はビューイング・スクリーン上に一つの絵があるのに気づいた。それまで知らなかったものである。それは突然に現われたのではない。ずっとそこにあったかのように思われたが、どうやら私は初めて見るらしい。その絵の左手の部分に私が乗っているコンパートメントがあるのに気づいたし、この絵は円盤全体の内部をあらわしているらしいことにも気づいた。一つの声が響いてくるのを聞いたが、今度は遠くから聞こえてくるようだ。その声はまったく違っていたにしてもアランの声であることがわかった。以前の声は歯切れのよい鋭い声だったが、今度のは柔らかくて流れるようで、音楽的な性質を帯びている。（注―先号四ページの図を参照）

「君は円盤の各部とそのメカニズムを見ているんだ。それを君の心がつかむことができるんだ。中央の隔壁の真上にある大きなドラム状の構造物はディファレンシャル・アキュムレーターだ。これは基本的には蓄電池で、利用し得る多くの自然エネルギー・ディファレンシャルのどれからもチャージできるんだ。〝チャージできる〟というのは、電位差はアキュムレーターの二つのポール間で生じる。両ポールの材質は君の想像以上に多量の自由電子を帯びている。制御機構がこれらの電子を船体の上部と下部に見える二個のフォース・リングを通じて流れ出させる。動く電子が磁場を作ることは電気力学に精通している君にはわかるだろう。フォース・リングを通じて出る莫大な電子が、きわめて強力な磁場を作る。磁場の方向や大きさは各リングによって制御できるし、単リングによって数種の方向にも制御できるので、逆になるフィールドかまたは進行に使用しようとする磁場に関連した一つのフィールドを作ることができる。このことは一定のフィールドに関して船体の姿勢の制御もできることになるんだ。

運動している物体のすべては今述べた理由によって周囲に磁場を持っている。つまりあらゆる物質は電子を含んでおり、運動している電子は磁場を作り出す。地球の磁場はその重力場にくらべてたいそう弱い。強いフィールドに対する加速が弱いフィールドに反発することによって生じることは君には理解しにくいかもしれない。君が二個の永久磁石の同じ極か反発する極同士を近づければどうなるかとか、磁力線がその普通の位置に対してほとんど垂直に外側へ押し出される様子などを思い出してみたまえ。そのように円盤のフィールドも外部へ広がって、それが地球のフィールドの力線と交差して必要な反発を生じることになるんだ。

君は小さな人間用コンパートメントの中で息苦しくなることなく長く呼吸できる理由を考えていたかもしれない。二個の座席の各下部に或るメカニズムを持った小さな通風孔があるのが見えるだろう。この通風孔が貨物室から人間用コンパートメントへ空気を循環させているのだ。この円盤内では空気を入れ変える必要はない。貨物室内の大量の空気が、緊急時には長時間十分な酸素を四人の乗員に供給することになっている。

ディファレンシャル・アキュムレーターの真上に見えるケースには制御装置がはいっている。これについては特に言うことはない。君はもう多種類のリモート・コントロール装置と自動制御についてよく知ってい

るからだ。われわれの装置は君たちのものよりも簡単で信頼できるんだが、ここでもその操作法を君に理解させるには数時間にわたる物理学の方向転換を必要とするだろう。

時間がなくなってきた。われわれは君の乗っている円盤を往路よりもやや速いスピードで帰してきた。君はもう出発点の真上近い所に来ている。われわれとは違って地球人はいろいろな重力を体験することによって、或る程度の喜び、または君たちの言う〝スリル〟を得るらしいから、お望みなら下降中に無重力つまり〝自由落下〟とでもいうべき状態を作り出してもいい。この状態に達すると人間は不快になり、やや危険にもなるだろうが、われわれはかなり接近できるから、君が安定を保っているあいだに無重力の感じを体験するだろう」

空中旅行がほとんど終わったという突然の感じが、円盤に乗って以来私が持っていた夢うつつの状態から私を覚まさせた。

「オーケー。打ってこい、マクダフ」と私は断頭台に登ったあの死刑囚のように言った。（注＝これはシェークスピアの「マクベス」から引用したもの。死刑囚とはマクベスのこと）「一度何かをやってみたいんだ」

すぐにコンパートメントのライトがつけられた。今までの完全暗黒のあとなので、ライトで目がくらみそうだ。両眼をライトになれさせようとしていると、胃が突然胸の方へつき上げられた。一瞬私は心臓が喉の下部につかえて脈打っているのを強く感じた。一方、他の上部の器官は両耳を通り抜けて押し出ようとしているかのようだ。私は飛行機で急降下やその後の急角度の水平飛行をやったことがあるし、無重力の感じを起こさせるように作られた多くの娯楽装置に乗ったこともあるが、このような感じは初めてである。落ちるという感じではない。ひどい緊張から解放された私のからだの各器官が、まるで引張られていたゴムバンドが急にちぢまったように上方へ飛び上がったのを感じただけである。幸いにもこの感じは長く続かなかった。数秒間で私はふたたび普通の状態に返った。「さほどの無重力状態でもないな」と思った。そして座席の両側を両手で強く押しつけた。ゆっくりと、やや優雅な態度で立ち上がる。頭がコンパートメントの天井にとどきそうだ。いやもっと優雅だったかもしれない。ただしからだの重心をうしろにかけていたために、立ち上がったとき前方へよろめいて、からだを左へ回してしまった。降下し始めた頃までには大体にうつむいて、手を伸ばして右側の座席のうしろをつかまねばならなかった。そのためイスの中でひざでからだを支えねばならず、目はバック・クッションから数インチしか離れていない。

そのときである。始め船内へはいったときに気づかなかった物を見たのは——。それは座席に刻まれた単純な模様にすぎなかったが、そのマークを認めて大きな精神的ショックをおぼえたのをアランが恐怖または苦痛と誤解したにちがいない。というのは重力加速度がすぐに正常にもどって、全身のあらゆる器官が内臓へ正しく割りあてられた空間を占めようとした別なつらい瞬間を体験したからである。

「何だ？」というアランの声が聞こえる。初めてはっきりとした関心を示したらしい。すると——「ああ、君はそのマークに気づいて、その意味を認めたようだね」

「そうだ」と私は答えて「いくぶんか読書したことのある人間なら、この樹木とヘビのマークに気づくだろう。こいつは地球のあらゆる民族の昔の碑銘や伝説などに見られるものだ。ぼくにはいつも地球の特殊なシンボルのように思われていたんだが、宇宙の彼方から出現したのを見て驚いたよ」

「それはこの次のコンタクトまでおあずけにしようと思っていた事だ」

とアランが言った。「話したいことが沢山あるんだが時間がない。われわれの先祖はもとこの地球から来たんだ。彼らは君たちの伝説で言っている〝ミュー〟または〝レムリア〟という大陸で大帝国と偉大な科学を築き上げた。同時に、アトランチス大陸にも大帝国があった。

彼らは科学的に対立していたのだ。最初は友好的だったが、時代とともに仲が悪くなって、両国は相手に対していろいろな業績を誇示し合うようになった。数世紀たってから彼らの科学は今地球に存在する科学水準を凌駕してしまった。わずかばかりの原子エネルギーを解放するだけではあきたらず――これは今地球の科学者がやっていることなんだが――彼らはエネルギー軸を中心に全質量を回転させることを知った。こうした状況下では二つの大陸が結局互いに破壊し合うことは当然だ。今日の地球の二大国がやろうとしているようにだ。

しかしこの話はわれわれが帰って来るまでおあずけにしよう。もう時間がすぎてしまった。母船を現位置に静止させるにはかなりのエネルギーを必要とする。しかも貨物船（円盤）を見捨てるわけにはゆかない。それは地上にいる。だからドアを開くことにしよう。じゃ、さよなら、ダン。われわれが帰って来るまでお大事に

＊　＊

夢遊病者のように私は円盤の床から降りた。そして砂の中を十数歩よろめきながら歩いて、うしろを振り返った。ドアはすでに閉じられて、振り向いたとき、船体の中央部あたりに水平な一すじのオレンジ色の光が現われ、それがカタパルトから発射されたように上方へ飛び上がった。上方へ吹き出された空気を入れ変えるために吸い込まれてくる空気で私は一歩前へ押されて、あやうくからだのバランスを失うところだった。光のすじがスペクトルのオレンジから紫まで変化するあいだ私はかろうじて円盤の方に目を向け続けた。このときまでには円盤は空中数千フィート高く上昇しており、光が紫色でなくなったとき、視界から完全に消えてしまった。

ひどくがっくりとした感じが全身にわき起こってきた。自分の仕事や人生の意義がすべて失われたような気がする。数時間前まで私は世界最大のロケットのテスト用計装を装備する自己満足的技術屋であった。その計画の中の私の仕事は一小部分にすぎないことがわかっていたにもかかわらず、まるで自分が少なくとも進歩の先端を切っているように思っていた。しかし今や（ロケットの）モーターが哀れな時代遅れであることを知ったのである。私は間の抜けた幼稚な科学の中のちっぽけな無意味な歯車の歯にすぎない。その科学はそれ自体の破壊の方向に進んでいるだけである。長いあいだ私は砂の中に立って、乱れたヤブのはびこった地面から星々を見つめていた。

＊　＊

アランは数ヵ月後に帰って来ると言った。そのときはまた私とコンタクトすると言う。本気で言ったのだろうか。それとも単なるていねいな別れの言葉にすぎなかったのだろうか。この国には宇宙人に対して私よりも役立ちそうな人が沢山いるだろう。私はただ待って――望むだけだ。

§§§

生きるための助言

ジッドゥー・クリシュナムルティー ●（4）

尊敬されたいという気持

自分はどん欲ではない。少ないもので満足している。人生のありきたりの苦難を体験したけれども、自分の生活はよかった、と彼は言った。相手はもの静かな人で、でしゃばらず、自分の気ままな生活態度を妨げられたくないという人であった。野心もなく、持物、家族、楽しい生活などのために神に祈った。友人縁者がこうむっているようなトラブルや争いなどに巻き込まれないのを感謝していた。彼は急速に尊敬されるようになり、エリートの一人だと思ってしあわせであった。他の女性にひかれることもなく、夫婦同士によくある口論はしたけれども平安な家庭生活を送っていた。特殊な悪習にも染まらず、しばしば祈り、神を礼拝した。「一体、私はどうしたというんでしょう？　トラブルがないというのは」と相手が尋ねた。彼は私の返答を待たないで、微笑しながら、やや憂いをあらわした様子で自分の過去の事や、現在やっている事、どのような教育を子供にさずけようとしているか、などについて話し続けた。自分は寛大ではないが、あちこちで少しながらも喜捨をしていると言う。人間だれもがこの世で自分の地位を得るために戦わねばならないと確信していた。

尊敬されたいという気持はのろわれたものである。それは精神を腐らせる〝悪徳〟なのだ。それは気づかれないように人間の方へ忍び寄り、愛を破壊する。尊敬されたいと思うことは成功したと感じることであり、世間で地位を得て勝手に振舞うことであり、自分の周囲に確実性という壁を築くことである。金、力、成功、能力、または徳などとともにやっ

て来るあの保証という壁である。この保証の独占は社会という人間関係の中に憎悪と敵対を生み出す。尊敬されたいという人はいつも社会という液の上澄みであり、それゆえ彼らは常に闘争と悲惨の原因となる。尊敬されたい人間は、他を軽蔑する人間と同様に、環境のなすがままになっている。環境の影響と慣習の重みが彼らにとってすごく重要なのである。というのは、こうしたものは彼らの内部の貧困さを隠してくれるからだ。尊敬されたい人間は防御的で、恐怖しており、疑い深い。恐怖が彼らの心中にあり、怒りは彼らの正義である。彼ら独自の徳と敬けんさが自分にとっての防御物なのだ。彼らは、中味がからっぽでたたくと鳴り出す太鼓みたいなものだ。尊敬されたい人間は真理に対して決して心を開かない。というのは、他を軽蔑する人間と同様、彼らは自分だけの自己改良に対する関心の中に閉じ込められているからだ。幸福は彼らには来ない。彼らは真理を避けるからだ。

どん欲でないことと寛大でないことには密接な関係がある。両方とも自閉手段であり、自己中心の消極的なかたちである。どん欲であるためには積極的で進出的でなければならない。戦って争い、侵略的でなければならぬ。この力を持たねばどん欲になることはできず、自閉的になるだけだ。進出は動揺であり、苦しい戦いである。だから自己中心は非どん欲という言葉でカバーされる。実際的な援助による寛大と精神的な寛大さは別物である。援助による寛大さは簡単なことで、それは教養のパタンにかかっているが、心の寛大さははるかに深い意味を持ち、もっと大きな知覚力と理解力を必要とするのである。

寛大でないことは楽しい、盲目的な自己没頭であり、進出的気分はない。この自己没頭の状態は夢想家のそれと同様に、それ自体の活動を行なうが、決して自分を目覚めさせることはない。目覚めの手段には苦痛をともなう。それで、老若をとわず、尊敬されようとすればむしろ独りにされてしまい、精神的に死ぬのである。

精神的寛大さと同様、援助による寛大さは進出的な動きではあるが、それはしばしば苦痛となり、あてにならず、自己啓示的である。援助による寛大さは行なうのが容易だが、精神的寛大さはつちかわれるものではない。それはあらゆる蓄積からの自由なのである。許すためにはキズついたかもしれないし、キズつくためにはプライドの集積があったかもしれない。「私」とか「私のもの」という関連した記憶がある限り、精神的な寛大さはないのである。

政治

山地の高所には終日雨が降っていた。おだやかな雨ではなく滝のような激しい雨で、道を洗い流し、山腹の木々の根をむき出しにし、地すべりや騒がしい激流を見せたが、数時間でおさまった。ずぶぬれになった少年が浅い水たまりで遊んでいて、母親のかん高い怒声にもまったく知らぬ顔をしていた。われわれが登っていると一頭の牛が泥道を下って来た。どうやら雲が切れて地面は水だらけになりそうだ。われわれもずぶぬれとなり、衣類の大半を脱いだ。雨は皮膚の表面でたわむれている。その家は山地の高い所にあり、町は眼下にある。強風が西から吹いて、もっと暗くて激しい雲を呼び寄せている。

部屋には火が燃えて、数名の人が話し合うために待っていた。窓を打つ雨は床に大きな泥水のたまりをつくり、水は煙突からも落ちて、火を

パチパチいわせた。

彼はきわめて有名な政治家で、現実的であり、非常にまじめで、熱烈な愛国者である。狭量でも自己探求的でもなく、その野望は自分のためではなく或る理想のためであり、人々のためであった。単なる雄弁なハッタリ屋または票集め屋ではない。自分の大義のために苦しんだが、奇妙にもさっぱりしていた。政治家というより学者に見える。しかし政治こそは彼の生命であり、その一派は彼に服従していた。夢想家ではあるが、政治のためには全力を集中した。一流の経済人である一友人もそこにいた。その人は莫大な収入の配分に関する複雑な理論を持ち、事実を知っていた。左右両派の経済人たちと交友しているらしく、人類の経済的な救済に関する独自な説を持っている。気楽に話したし、言葉につまるようなこともない。二人とも大勢の群集に熱弁をふるった人である。

新聞雑誌などには政治に、そして政治家の発言や言動に、かなりのスペースがさかれている。もちろん他のニュースも出るが、政治に関するニュースが最も多い。今は経済的、政治的な生活がまったく重要となってしまった。外的な環境——慰安、金、地位、権力など——が優勢であり、われわれの生存を形成しているように思われる。表面的な見せもの——肩書き、服装、敬礼、旗など——が次第に重要になっており、生活するための総括的な方法は忘れられたか、または故意にしりぞけられてしまった。概して人生を理解するよりも社会的政治的活動にはいり込む方がはるかに容易である。組織化された思想、政治的または宗教的な活動に親しむことは、日常生活の偏狭さや骨折り仕事からの体裁のよい逃避を与えてくれる。心が小さくても大きな事や有名な指導者たちについて話すことはできるし、世事に関するそら言で自分の浅薄さを隠すこともできる。

経験の行為

政治とはさまざまの結果を調和させることである。人間の大半は結果に関心があるので、外側が重要な意義を持つ。結果を扱うことによってわれわれは秩序と平和をもたらそうとするが、工合のわるいことには事はそう簡単ではない。生活とは内部外部ともに総括的な手段である。外部は内部に決定的な影響を与えるが、内部は常に外部に勝つ。人の本性は外部に現われる。外部と内部は切り離すことはできず、完全な密室の中に保たれている。この二つは絶えず互いに干渉し合うからだ。しかし人間の内部からわき起こる要求、秘められた追求、動機などは常にもっと強力である。人生は政治的経済的活動にかかっているのではない。生活は単なる外部的な見せものではない。樹木が葉や枝だけでないのと同様である。生活とは、その美しさが完全さの中にのみ発見される総括的な手段なのだ。この完全さは政治経済の皮相的な面には見られない。それは因果を超えて見られるものである。

人間は因果とたわむれていて、それを超えないので、言葉の上では超えたようなことを言いながら生活は空虚であり、たいした意義を帯びなくなっている。人間が政治的刺激や宗教的感傷のドレイとなっているのはこのためである。さまざまの手段を完全にしてこそ希望がある。この完全さはイデオロギーや特殊な権威に従うことや宗教や政治などによってもたらされるのではない。それは広く深い〝知覚〟によってもたらされるのである。この知覚は意識の深層にまで及ぶもので、表面的な反応に満足しないものである。

谷は蔭になっており、沈みゆく太陽がはるか彼方の山頂に落ちた。山々の夕焼けの輝きは内奥からにじみ出るように思われた。長い道の北側にはだかの山々があり、夕日にさらされている。南側には丘が緑をたたえ、ヤブや樹木がうっそうと茂っている。道はまっすぐに伸びて長い優雅な谷を分断している。このすばらしい夕方の山々は親しく、非現実的で、明るく、やさしく見える。大きな鳥が天空を高くものうげに舞う。リスたちがのろのろと道路を横切り、遠くで飛行機の爆音がする。道路の両側にはよく手入れのされたオレンジの果樹園がある。暑かった日の日暮どき、紫サルビヤの香りが強くただよい、日に焼けた土と干草の匂いもたちこめている。輝く実をつけたオレンジの木は暗い。ウズラが鳴き、カッコーがヤブの中に隠れた。長いヘビトカゲが犬に邪魔されて乾いた雑草の中へのたくりながらはいり込んだ。

〝経験〟と〝経験の行為〟は別問題である。経験は〝経験する状態〟に対する障壁となるのである。経験が如何に楽しくても邪悪であっても、それは〝経験の行為〟の発展を妨げる。（注＝ここでいう〝経験〟とはすでに経験されてしまったものを意味し、〝経験の行為〟とは経験されつつある状態を意味する）　経験はすでに時間の網の中にあり、過去の中にある。それは一つの記憶となってしまい、現在に対する反応としてのみ生活に浮かび上がってくる。経験の重みと強さは現在に対して影を投げる。そのようにして〝経験の行為〟が経験となるのである。心は経験そのものであり既知のものである。それは決して〝経験する状態〟の中にはない。なぜなら心が経験するものは経験の連続であるからだ。心は連続を知っているだけで、その連続が存在する限り、決して新しいものを受け入れることはできない。連続するものは決して〝経験する状態〟の中にはない。経験は〝経験の行為〟の手段ではない。〝経験の行為〟は経験をともなわない状態である。〝経験の行為〟が存在するためには経験は消滅しなければならない。

心はそれ自身の自己投影や既知のものだけを招き寄せるのである。心が経験することをやめるまでは未知のものに関する経験の行為はあり得ない。想念は経験の表現であり、記憶の反応である。〝考える行為〟が干渉する限り〝経験の行為〟はあり得ない。経験を終わらせる手段や方法はない。なぜなら手段そのものは〝経験の行為〟の妨げとなるからだ。結末を知ることは連続を知ることであり、結末に至る手段を持つことは既知のものを支えることである。達成しようという欲求は消え去らねばならない。手段や結末を作り出すのはこの欲求なのである。〝謙そん〟は〝経験の行為〟にとって根本的に重要である。しかし〝経験の行為〟を経験の中に吸収しようとして心は何といきりたっていることだろう！心は如何に急速に新しい物事を考えてはそれを古くしてしまうことだろう！　そこで心は経験するものと経験されるものとを確立し、それが二元性の争いをひき起こすのである。

〝経験の行為〟の状態の中には経験するものも経験されるものもない。樹木、犬、夕空の星などは経験者によって経験されるものではない。それらは〝経験の行為〟の動きそのものである。観察者と観察される物とのあいだにギャップはない。想念が想念自体の正体を知るための時間や空間的間隔はない。想念はまったく介在しないが〝実体〟はある。（注＝この〝実体〟はアダムスキーのいう意識に相当するもの）　この〝実体〟の状態については考えたり冥想したりできないもので、手でつかみ取るべき物ではない。経験者が経験することをやめるときこそ〝実体〟がある。その動きの静ひつさの中に時間を超えた永遠性があるのである。

（久保田訳）

UFO現象のことをよく知っている人なら、常につきまとう特徴の一つが〝光〟であることを知っている。実際それは最も重要な特徴なのかもしれない。指向性のある光線、連続的に色光を変化させながら動く光線や光輝、着陸した物体からあたり一帯を探索する直線のレーザー状光線、しかもそれが一、二キロメートルの距離に達することもあるのだ。また空中の円盤から光線に乗って人間が上降したり上昇したりする。〝曲がる〟光線、金属製とおぼしき物体の表面から出るコロナ状の光輝等々。UFOにまつわるといわれている光現象の範囲には限界がないらしい。現在われわれが知っている以上に光について理解したならば、UFOに関して、しかもその推進

法に関してもっと多くの事が理解できるのだろうか。

多数の別な報告によると、人間の心をコントロールする手段として光線とか光る物や球などを用いる〝人間〟がいることが強調されている。またトランカス事件やその他の事件に見られるように、犬やその他の動物を眠らせたりボーッとさせたりするし、イタペルナ事件のように人間を空中に上昇させたりする例もある。また殺したり不具にしたりする光線もある。

二、三の例で白昼の目撃に関するものがあり、その場合は不思議な光線（それとも他の放射線か？）が上空の奇妙な物体から地上へ放射されている。こうした例のなかにはこのような放射線やUFO自体も見られず、ただ写真を現像してみるとその中に奇妙な物が写っていて、それがどうやら〝円盤〟または〝放射線〟らしいことに初めて気がつくという場合もある。もちろん、ときにはそれらがレンズのフレアー、二重露出、薬品によるいたずら等の如き納得のゆく説明――しかも証拠のある説明が出てくることもある。しかしここではこうした説明でもどうしようもない実例に関心を向けようというわけで、三件ほど取り上げることにしよう。一つは白昼の事件で、二つは夜の出来事である。

1. ミナスゼラエス事件

ウォルター・ビューラー博士（注＝ブラジルGAPリーダー）の「一九六八、九年ブラジル円盤事件、第二部」の第三十六には、一九六九年七月十三日付のブラジルの新聞コルレオ・ブラジリエンセ紙の記事を載せているが、それによると、ウバルド・ローサス氏が一九六八年九月上旬の夜、ミナスゼラエス州コロマンデル付近の道路をドライブ中、レンズ状または葉巻型物体を見たけれども、その物体から強烈な多条光線が放射されるのを見たという。

2. フランスのロテガロンヌ事件

このすばらしい最近の事件の詳細に関しては、ピエール・ベルトン大佐と、フランスの円盤研究グループGEPAの会長ルネ・フーエーレ氏に負うところが大きい。後者が出している〝空中現象〟誌第三十号（一九七一年十二月発行）にはフーエーレ氏の特別な要請にこたえてベルトン大佐が書いた記事が掲載されている。二名の憲兵隊将校をつれた大佐は事件発生よりわずか一週間後に目撃者に会い、きわめて明快かつ詳細な模範的報告書を作成することができた。

目撃した日は一九七一年十一月十三日から十四日にかけての夜で、この最初の記事は〝不思議な機械に追跡されたロテガロンヌの農夫〟という見出しのもとにラ・デペシュ・ドュ・ミディ紙に掲載された。場所はロテガロンヌ県マルマンド郡セーシュの北東十二キロばかりの所にある田園地帯のラシャプルである。

十一月十三日（土曜日）の午後九時頃、農夫のアンジュロ・セリョは自分のトラクターに乗って約四ヘクタールの自営農場を堀り起こし始めた。この農場は彼の家に隣接し、ラシャプルとサンアビをつなぐ道路に沿った約二百メートルにわたる前面地を持っている。

セリョのトラクターは二個のヘッドライトと一個の尾燈がそなえてあって、そのすべてが点燈されていた。しかも調節できるスポットライトもあった。

午前一時五十分頃（十一月十四日）仕事が終わりかけたとき、彼は一

つの光る物に目がひかれた。大きなヘッドランプから来る光のようで、北西約一キロの距離らしい。この光は部分的に樹木によってさえぎられている。だれか他の農夫がトラクターで夜間作業をやっているのだろうと思った彼はそれ以上注意を払わなかった。

しかしそのあと畑の北の境界をなしている小川の方に向かってトラクターで丘をくだっていると、またその光が目について、しかも自分の方へゆっくりやって来るのがわかった。地上の光ではない。その光の右側に小さな赤い光も見える。トラクターのエンジンの音のために他の音が聞こえないので、彼は後部に赤色燈をつけたヘリコプターが接近して来るのだろうと思った。

仕事が終わって道路の方へ斜面をくだって行きかけたところ、物体はなおも接近して来るので、もっとよく見ようとして二、三度回り、スポットライトをつけてその正体をつきとめようとした。

しかし物体は彼から約四十メートルの右寄り頭上に来て、トラクターと大体同じスピードで進行して来る。（時速五キロであった）物体の光は白昼のように明るくて、トラクターは強烈な黄色の光で照らされた。どうやら一列にならんだ五つの強力なランプから放射されるらしい。小さな赤色光はまだついていて、黄色光ランプの列の右側約四、五メートルの所にある。

恐ろしくはなかったが、わけのわからぬままセリョはふたたび道路のそばのあぜの端まで来て停止した。するとその瞬間、頭上で静止していた物体がゆっくり降下し始めて、地上十ないし十五メートルの所まで来た。急にこわくなって、故障を起こした飛行機が頭に落ちかかってくるのではないかと思った彼は、トラクターをニュートラルにし、エンジンもライト類も切らないで飛び降りて、弟のジャンの家に向かって道路を一目散に走り出した。危急を告げて、必要とあれば助けを求めようとしたのである。

だがトラクターから約三十メートル逃げたときに振り返って見ると、物体はまた上昇していて、もと来たときと同じコースを後退している。そこで弟を呼ばないことにしてトラクターの方へ引き返し、エンジンとライト類を切ってしまった。不思議な物体は五十メートルむこうにいる。ここで彼はひどく驚いた。その物体から音が聞こえないことに気づいたのだ。完全な無音で動いて行くのだ。

右側になおも赤い光を放ちながら去って行く物体は今や小川を越えた。すると突然その光は更に強烈になった。新しいランプ類が光を放ったようだ。それから物体は低い丘の頂上を越えて視界から消えてしまった。

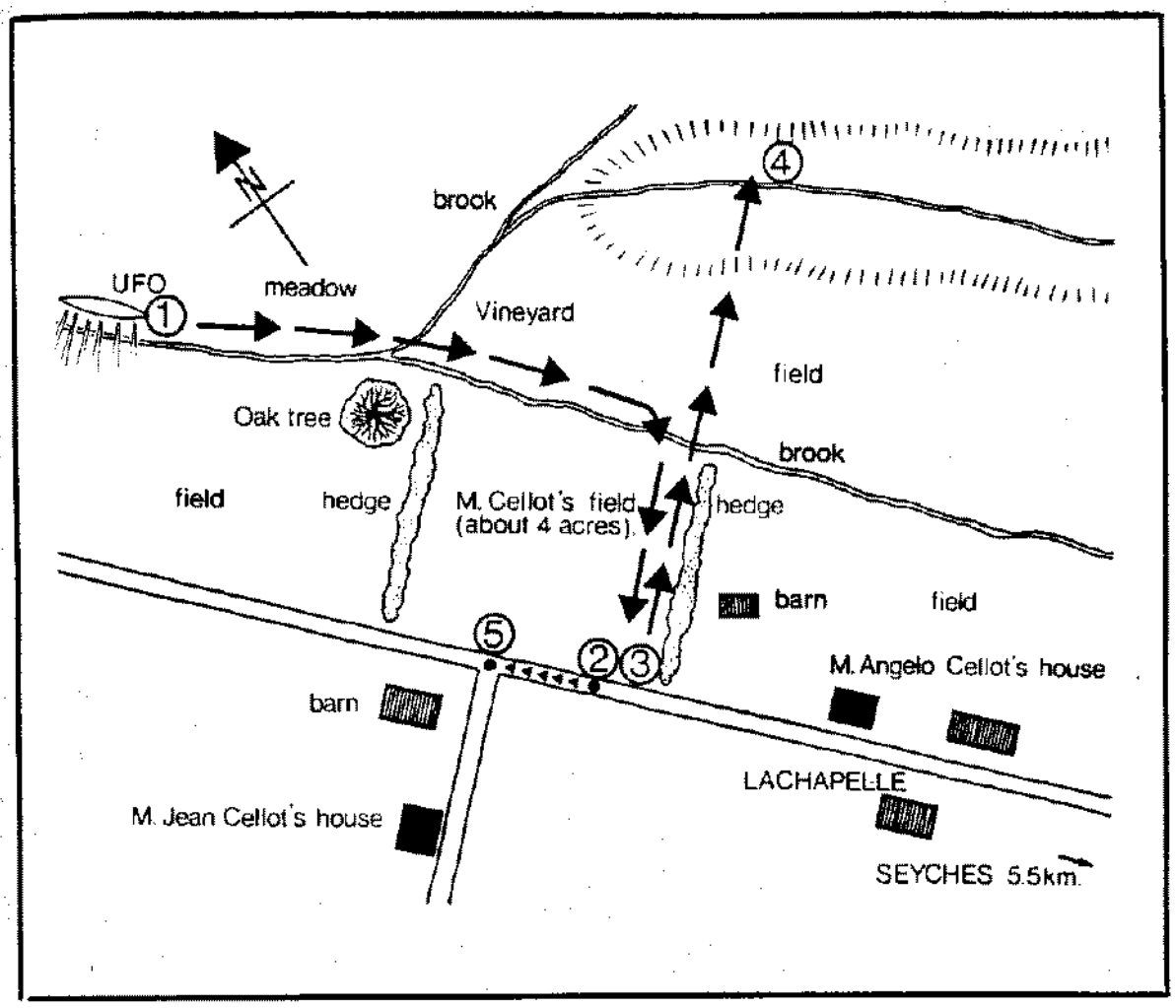
すべては終わったが、後に調査した人々に語ったよりもおそらくもっと気の転倒していたセリョは、もう三十分ほど作業の結末を見たいと思ったけれども、もう働く気がしなくなり、ふたたびトラクターを動かして小屋の方へ引き返し、それから寝た。時刻はちょうど午前二時である。

セリョ氏

一九四十年生まれのアンジュロ・セリョ氏はがっちりした体格の男である。彼は健全な精神の持主で、大げさでも控え目でもなく気楽に話す。セーシュ憲兵隊長が確証しているように、セリョ氏は近隣では最も立派な住民として評判が高い。彼はブリーヴの第百二十六歩兵連隊で軍務に服し、夜間に観測し続けることや歩哨の任につくことには慣れている。また彼は良き夫、良き父親としても評判がよい。まじめで勤勉である。彼は翌朝まで事件については妻に話さなかった。これまでこんな現象を見たことはなく、円盤について読んだこともない。空飛ぶ円盤のことを

他人が話すのを聞いたことはあるが、信じてはいなかった。彼の話によると、円盤は自分の方へ直進したのではなく、少しジグザグで来たのだという。それは〝浮かんでいた〟と語っている。

赤色の光については、いつも黄色の光から同じ距離の所にあったけれども、まったく同じスピードで動いているようには見えなかった。彼の意見によれば、物体の長さは赤色光を含めて十メートル程度であった。



（１）物体が出現した地点　（２）トラクターがセリョ氏によってとめられた地点　（３）物体が静止した場所　（４）物体が頂上を越えて見えなくなった位置　（５）セリョ氏が走ってとまった位置

現場の地形

その地域は一連の小さな少々けわしい谷に続いており、多くの場所から――特にラシャプルから――高圧の送電線が見えるけれども、それは数キロ彼方である。このあたりの土地一帯では作物が作られており、ブドー畑と牧草地が少しある。各畑は生垣で分割してあり、この特徴のためにその地域には木が生い茂っているような様相を呈している。

セリョ氏の畑は北の方へ向かってかなりの傾斜をなしている。つまり道路から小川にかけて下り坂となり、それから地面は丘の頂上に向かって急な登り坂となる。この頂上で物体が見えなくなったのである。

トラクターには十二ボルトの電気系統がそなえてある。スポットライト（白色光）は

現場のパノラミック写真（角度を変えて撮った数枚の写真をつなぎ合わせたもの）に円盤と黒線を描き込んだ合成図。矢印は円盤の進行方向を示す。

四十五ワットである。十一月三十日にはその畑に磁気は検出されなかった。畑の小麦（十一月十四日からまかれた）の成長の様子や、円盤で照らされた畑の小麦とそうでない畑の小麦に何かの相違があるかどうかを観察するようにとセリョ氏は頼まれていた。

天候

当時の天候は霧が深く、こぬか雨が降っていた。十一月十三日の午後は雨が降っており、翌朝、すなわち事件後の十四日にも雨となった。しかし目撃の頃は風はなく、空は暗くて星は見えず、月も出ていない。（十一月の新月は十八日である）

円盤

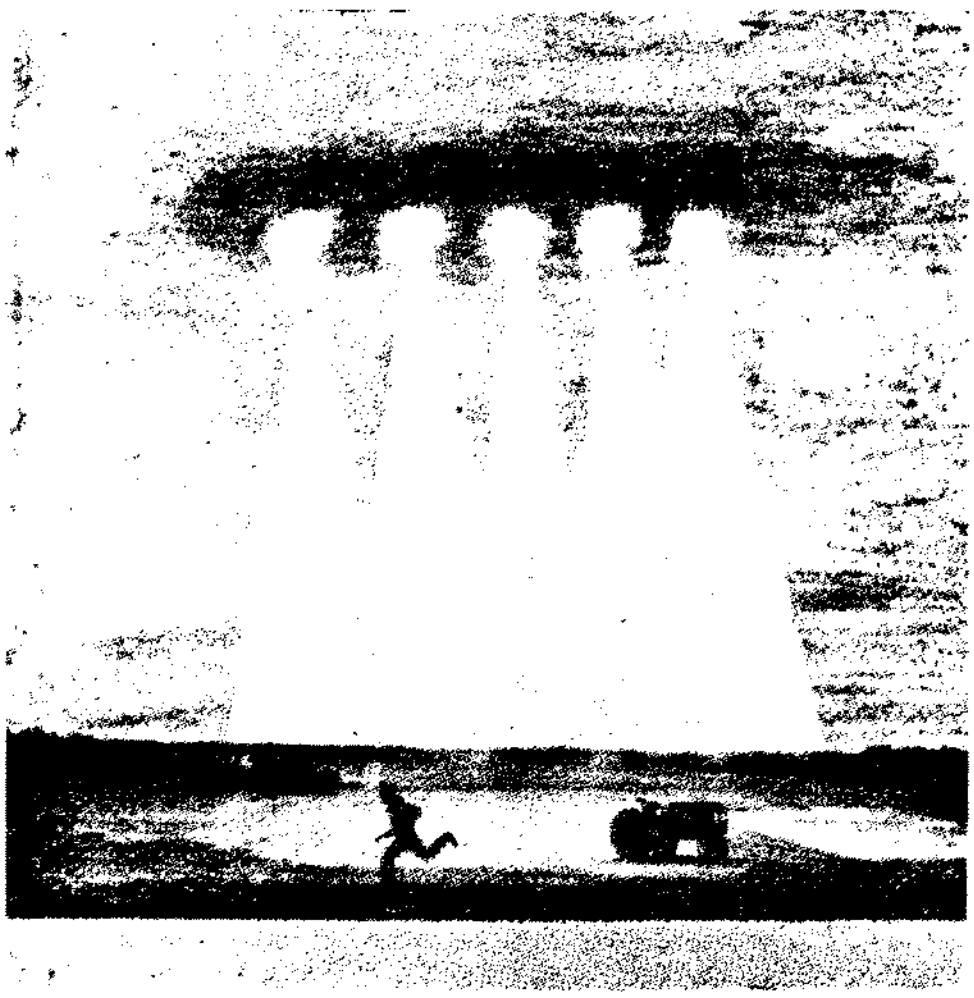
円盤から放射された光はあまりに強烈すぎて、そのため目撃者は各小屋のこまかい輪郭を見分けることはできなかった。彼が気づいたのは目のくらむような照明だけである。しかしそれはほんの短時間だし、事件以後彼は肉体的にも精神的にも影響を感じていない。

彼の話によれば、黄色光線を放射した円盤のランプすなわち投光器は一列にならんでおり（少しカーブしていたかも？）、そこから照射された光（複数）は輪郭のはっきりした円すい形をなしていたが、それにもかかわらず地面は一カ所が照らされていただけだった。いつも五つの黄色光の右手に、しかも同じ高さにあった赤色光は、黄色光の列の全体の長さと大体等しい距離にあった。

ベルトン大佐はセリョ氏と会っているときにスケッチしたが、セリョ氏はよく描けていると言った。事件以来彼は夜間に畑でただ一人で仕事を続けている。

別な目撃者

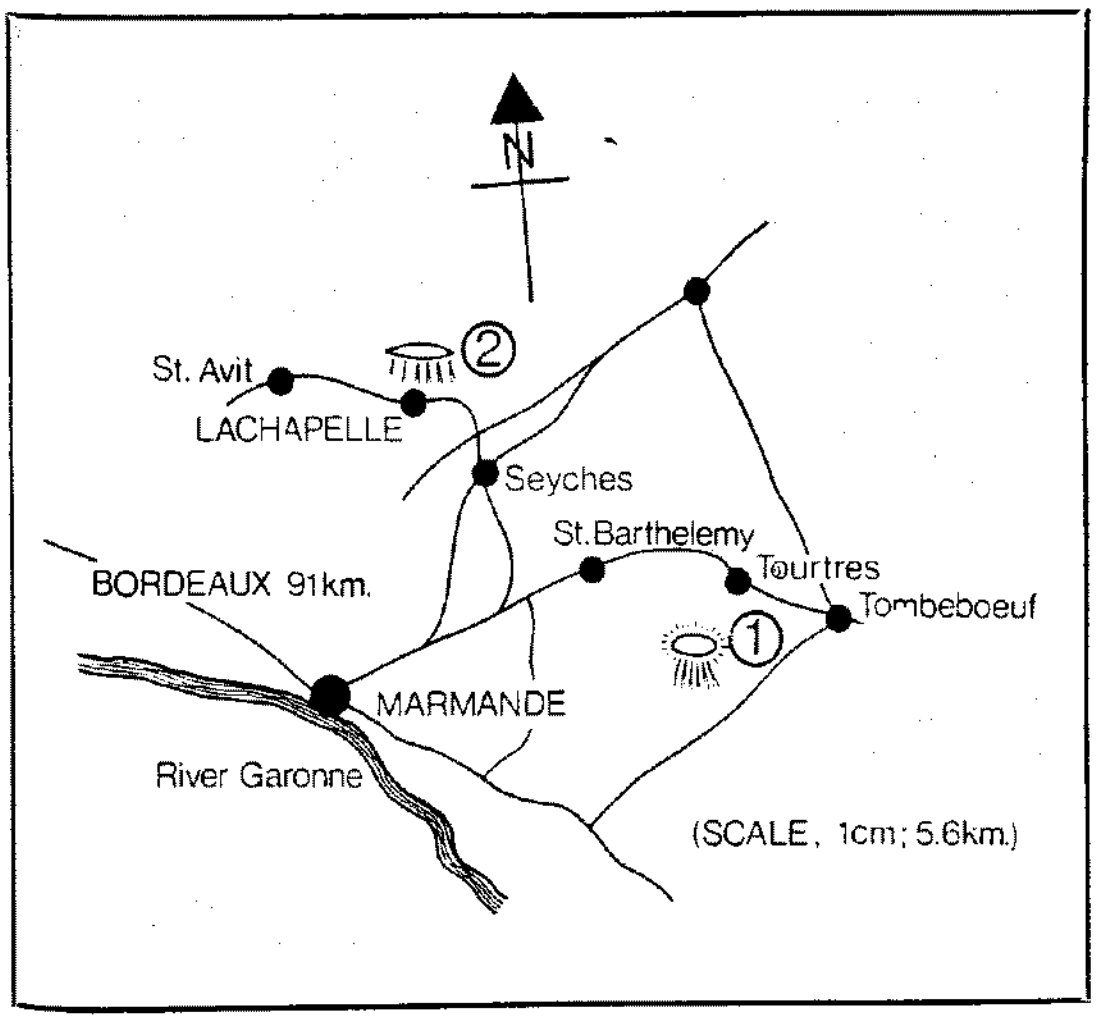
アンジュロ氏の弟であるジャンも結婚して家族があり、すでに述べたようにラシャプルでアンジュロの家から道路を二百メートルばかりへだてた所に住んでいる。アンジュロと同様、ジャンもがっちりした愉快な農夫で、全然異常ではなく、バランスのとれた人である。しかし彼は何も見なかった。



デペシュ・ドュ・ミディ紙の記事にはラシャプルの別な住民の述べた説明が載っている。すなわちテオ・ティス氏で、彼は事件よりも数日前に似たような現象を見たという。しかしこの記事は正確ではない。ティス氏が見た物は巨大な赤い球体で、彼は今までにだれにも語らなかったが、実際には〝数日前〟ではなく〝四年前〟だったのである。したがってベルトン大佐はテオ・ティス氏にインタビューしなかった。

左がアンジュロ・セリョ氏。右は弟のジャン。

一方、アンジュロ・セリョ氏は自分自身の体験と同じ日、すなわち十一月十三日の土曜日に、トゥールトル村の一住民が空中に不思議な光る物体を見ていると述べている。この目撃者はニベール・ヴァンソノー氏で、年令は約四十才、セリョ兄弟のイトコで、トゥルトル村長の息子である。この村はラシャプルの南東約十五キロの所にあるトンブブー付近の小村である。



（１）１９７１年１１月１３日午後８時に見られた物体の位置
（２）１９７１年１１月１４日午前２時に見られた物体の位置

ベルトン大佐が質問したところ彼は次のように答えた。

「十一月十三日の土曜日、午後八時頃、私はトゥールトルの南五百メートルの所にある自分の畑でライトをつけてトラクターで仕事をしていました。そのとき、サン・バルテルミー・ダジュネの方向に（北西約五キロ離れた別な村）木々のあいだから一つの明るい光を見ました。どうも別なトラクターのヘッドライトから来る光のようでした。それでそのときは注意を払わなかったのです。

三十分後に家へ帰ったとき――家はトゥールトル村のある高台の斜面の中ほどの所にあるのですが――なおもサン・バルテルミーの方向にまた同じ光を見ました。ところが驚いたことにそれは地上の光でないことがわかったのです。地平線より上の空にジッと浮かんでいる強烈な光でした。その物体は大きなヘッドランプのように地面に向けて円すい形の光線を放っています。数分間見たあと、動かないことに気づいてから私はもう気にとめませんでした。

しかし数日後にイトコのセリョが見た物のことを聞かされたとき、彼が見たのと同じ物を私も見たのだと思いました」

3. ウィンダメアー湖の事件

このきわめて興味深い事件は一九六三年八月に発生した。そのとき、現在はBBCテレビのカメラマンである一紳士がウィンダメアー湖にいたのである（イングランド北西部の湖沼地帯）。その氏名はわかっており、事件は本人のBBCの同僚であるC・B・フォックス氏によってもたらされた。筆者はフォックス氏を個人的に知っているが、氏はこの事件が真実であることを心から誓っている。

一九七〇年十二月二日付の筆者宛の手紙でフォックス氏は次のように述べている。

「この写真を撮影した友人であり同僚である人の正直さと誠実さを私が心から信じていることを知っていただきたいと思います。彼は一九六三年八月にウィンダメアー湖のそばにとめた車の中にすわって、簡単なローニー判のボックスカメラで開いた車窓から写真を撮っていました。フィルムはコダックのカラー・リバーサルです。この写真はコダック社によって元のリバーサルから作られたものです。元のリバーサルは友人がまだ家の中のどこかにしまい込んでおり、目下探しています。

現像してみると、二個の水平の白い物体らしき物が写っていて、そこから光のスジ（複数）が湖のむこう側の地上に降りそそいでいるのです。ここで強調しなければならないのは、湖の光景を撮影したときに、友人はもちろんこんな物体や光線に気づきませんでした。

このリバーサル写真はデーリー・エクスプレス紙に送られ、同紙がその写真を十インチ×八インチに引き伸ばし、そのサイズで白黒のプリントを作ったのです。この引伸写真は物体と光線を非常に鮮明に写し出しましたが、写真部員たちはどうにも説明がつかず、コダック社も同様でした。

数年後、私と友人がBBCのテレビスタジオで一緒になって、UFO問題が話題になったとき、私はこの写真の存在を知ったのです。自分はUFOに興味があるのだと言ったら、相手はこの写真のことを話して、持って来るから調べてくれと言うのです。

私は大抵の写真のキズについてはよく知っています。レンズのフレアー、乳剤の毛状現象、網状のシワ、現像中の薬品による汚染、温度の影響、二重露出等です。しかしこの写真の場合はこれらのどれもあてはま

りません。私の体験ではこの写真はまったくユニークなものです。

私が綿密に検査したところ、三つのポイントが出てきました。

1.この写真は決してインチキではないと確信する。

2.光線（複数）はわずかに〝タル状〟のゆがみを示しているが、これは簡単な複玉レンズの影響をあらわしている。

3.二個の水平の白い物体と光線の数及び配置のあいだには、きわめて密接な関係があるように思われる。このことは、薬品または現像のミスとはまったく考えられないことである（これはコダック社によっても確証されている）。

これ以外はまったくの推測です。あなたのご意見をお聞きしたいと思います。

C・B・フォックス

フォックス氏を通じて私はこの写真を撮った同僚が最近までドイツでBBCテレビの一員として働いていたことを知っている。フォックス氏によれば、氏が知る限り、リバーサル写真の元のものはまだ探し出されないという。

ところが、これが有望な事件で、遅れないようにしようと思った私はフォックス氏から提供されたカラー写真と白黒プリントをパーシー・ヘネル氏に検査のため送った。するとプリントの注意深い検査と検討をした後、ヘネル氏は、先に述べられた種々の人為的なミスがこのプリント中の現象にあてはまるような証拠はないとし、この物体や光線が何であるにせよ、写真はまったくのホンモノで、でっちあげではないという結論を出したのである。

なおここで強調したいのは、私はBBCそのものを取り上げているのではなく——読者のなかにはかなりはっきりした結論を出している人がいるかもしれないし、いないかもしれないが——たまたまBBCの社員であったにすぎない二人の紳士を個人の資格で取り上げたにすぎないということである。

左の写真は一九六三年八月に撮影されたウィンダメアー湖上空に現われたUFOと多条光線。矢印が光線を示す。この写真ではUFO自体は見えない。

●●●GAP哲学研究講座●●●

意識と惑星と人間

(2)

久保田八郎

四官の独立性

よくGAPの会員の方で、四つの感覚器官が互いに独立して、それぞれ心を持っていて、他の器官を非難したり分裂感情を起こしたりしているというアダムスキーの説明がどうしても信じられない。分裂感情やエゴの心を起こすのは大脳内部の何かではないかと言う人があります。現在までの通念としては目は単なる視覚器官で、外界の光線をキャッチして信号を脳に送る装置にすぎず、耳は外部の音波をとらえてその信号を脳に伝える聴音器にすぎないことになっていますが、実際は次のとおりです。

すなわち四官(目、耳、鼻、口)はそれぞれ独立していて、各器官は心を作り上げる集合体です。つまりこれらの各感覚器官を形成する細胞群が〝心〟を持っていて、各自が意見を出し合うのです。したがって目には自分の(目の)心を満足させる光景が映じても、その光景にともなう音響が耳の心にとって不快であれば耳はそれを拒絶しようとするために、目と耳が互いに争って混乱が生じ、そこに迷いが起こります。たとえば私が音楽会へ行くとします。広いホールのステージに並んだオーケストラのきらびやかな光景を見て、まず目が満足します。しかし楽音が響き始めてその演奏が下手なのを知って「だめだ」と騒ぎたてるのは耳です。ところが目は絶対に音響に関知することなく、あくまでも視覚的な形象のみにとらわれて、整然と弓の動く弦楽器群、照明を反射してきらめく管楽器群などを見ながら「オーケストラのなま演奏を見る機会はめったにないからもっと見よう」と主張しますが、一方、耳は「つまら

ないから帰ろう」と目をせきたてます。こうして両者間にトラブルが発生したときの状態が帰ろうか帰るまいかと迷っている状態なのです。大脳中の別な何かが迷いを起こすのではありません。このことは医学がはるかに進歩して細胞の機能が解明されれば実証されるようになるでしょう。大脳は一種の記憶の貯蔵庫であり増幅器であるにすぎません。大体に人体各部の諸器官を形成している細胞群はその持場の器官を形成する意志（または心）しか持たないのです。胃の細胞は胃を形成する意志（または心、または記憶）しか持たないのですが、しかしそのために胃の大部分を切り取っても多少とも胃の一部が残っていれば、そこに〝根〟が残ることになりますから、この〝根〟からふたたび胃が生えてくるはずで、かつてアダムスキーは胃の大部分を切除した患者に再度胃を生やさせるという奇跡を演じたことがあるということです。しかし普通人にはこのような奇跡は発生しません。これは一般人の習慣的想念により、「そのようなことがあるはずはない」という否定的想念が、胃を再生させようとする細胞の意志を抑圧するためです。この否定的な習慣想念は数千年の年月を通じて人間の中に根強く植えつけられているためにきわめて強大な力を持っています。したがって病気の治癒その他で奇跡を起こそうと思えば、まず自分の想念内容を観察して、人類の誤ったネガティヴな通念にこり固まっているかいないかを綿密に調べる必要があります。「胃がひとりでに生えるなんて、そんなバカなことが」という大半の人が起こすネガティヴな想念に同調しないことが大切です。それでは胃を生やすための具体的な方法はどうなのかということになりますが、これについては希望を実現させるための「心の映画法」と私たちが呼んでいるすばらしい方法がありますから、これを応用すれば病気の治癒ばかりでなく望ましい物事を奇跡的に実現させることができます。次章で詳述しましょう。

希望を実現させる「心の映画法」

人間にはだれしも希望があり、それを実現させようとして努力します。進学、就職、事業、結婚、家の新築等、人それぞれの立場により望ましい事柄を達成しようとして悩み苦しみますが、必ずしもうまくゆきません。そこで「ままならぬ世の中」という言葉を絶対的な権威を持つかの如く考えて、結局それが習慣的想念と化し、いくら努力しても運が向いてこなければだめだとか、現在の自分の環境から考えれば到抵実現は不可能だと思い込んであきらめたりします。しかしあきらめるのは早計です。すばらしい方法があるのです。

かつてアダムスキーは「望ましい物事を実現させるには、その物事をはっきりと心中に描いて放つようにすればよい」という意味のことを述べていますが、キイはここにあるのです。アダムスキーの説明はしごく簡単なためにこの部分はとかく読者から軽視されがちだと思いますが、これは重要な真理を含んでいます。以下これを補足的に説明しますと次のとおりです。

望ましい物事がある場合は、それがすでに実現している光景をイメージとしてまず心の中に鮮明に描きます。すなわち完全に実現してしまったときの光景だけを描くのです。しかもイメージを描くときに暗い気分で描いてはだめであって、すでに実現したときに当然わき起こる大いなる喜びや感動の気分などを起こしながら描くことが秘訣なのです。そし

て重要なのは、実現するまでの径路や手段などを一切考えてはいけないということです。ただ最終目標の実現したときの光景だけを、しかもそのときの喜びの感情に満たされながら描くことが大切です。ああしようか、こうしようかと実現するまでの途中の手段方法などを考えてはいけません。なぜなら喜びの気分に満たされて鮮明なイメージを描いたとたんにそれが本人の内部の意識に刻みつけられるため、あとはすべて意識がやってくれるからで、なまじっかセンスマインドで手段方法などを考えると意識（または英知あるパワー）の持つプログラムがゆがめられることになりますから、せっかくイメージを描いても実現しないことになります。だから実現した光景だけを描けばよいのです。これは毎日絶えず描き続ける必要はありません。実現した光景の強烈なイメージを描いて体がぞくぞくするような歓喜に満たされたら、もうそれは意識に刻まれた証拠ですから、あとは忘れてもよいのです。そうすると忘れた頃にひょっこり実現して驚喜するという結果になります。たとえば自動車を一台入手したいと思う場合、それがほんとうに自分の生活に必要かどうかをよく考えて、どうしても必要だという結論が出たら、このイメージを描く方法すなわち「心の映画法」を応用します。その際は、どうしたら入手できるだろうかという手段などは一切考えないで、とにかくすでにピカピカの新車を自分が手に入れて、うれしそうにそれを磨いている光景、近所の人たちが寄って来て「すばらしいですね」と祝福している光景、自分がハンドルをにぎって爽快な気分でドライブしている光景などをほんとうにそのときになった気分で描くのです。このとき「必ず実現する」という言葉をとなえる必要はありません。すでに実現している気分にひたっているのですから、もう四次元の世界では実現していることになるので、今更「実現する」ととなえる必要はないわけです。

このイメージで描かれた自動車がどのような径路から如何なる方法によって本人の眼前に出現してくるかは本人のセンスマインドではわかりません。だからそれはせんさくしない方がよいのです。人間の内部に宿る意識（コズミック・パワー）はすべてを知っていますから、これにまかせればよろしい。ここでもセンスマインドを意識の従者にすることの重要さがわかります。この「心の映画法」を応用してすばらしい結果を出した実例は日本GAP会員間でいろいろあります。私（編者）は多数の会員の方から個人的な身の上相談などを受けますが、私のアドバイスどおりに実行して成果をあげた人の実例をいちいちこの機関誌に掲載しませんので、その辺の様子は会員間でよく知られていないと思います。しかし実例をあげますと、会員のA氏はかねてから独立して会社を設立したがっていましたが、なにせ薄給のため一千数百万円にのぼる資本を自分ではどうすることもできず、さりとて見込出資者もなく、なかばあきらめていました。ところがこの「心の映画法」を知ってからすぐに強烈なイメージを描いたのです。自分がすでにでき上がった会社の社長のイスにおさまって若い有能な社員たちと楽しく働いている光景です。そして全身が喜びに溢れてぞくぞくするような気分を味わったのです。氏はこれを毎日とまでゆかなくても数日おきぐらいにくり返していました。すると数カ月たって、まったく思いがけない方面から有力な援助者が現われて出資することになり、希望どおりの会社を設立することができました。もちろん氏は単なる金もうけのためでなく、社会のためにつくそうという意図のもとに事業を始めたのですから、これは魂の目的に合致しています。だから実現したのです。邪悪な意図を有しない限り、この「心の映画法」はあらゆる面で応用できます。たとえば腹の底から愛し合っている若い男女が結婚したいと思っても双方の親が家柄がどうのと

理由をつけて反対する場合、当事者同士が互いに相手こそ自分の魂の目的の遂行に最適であると思うならば決して悲観することはなく、逆に明るい心を持って例の「心の映画法」を応用すればよろしい。すなわち二人が盛大な結婚披露宴で多くの人々から——特に双方の両親から「よかったね！」と心から祝福の言葉を受けている光景を描くのです。もちろん全身がぞくぞくするような喜びの気分をもってイメージを描くことが大切です。そうすれば必ず実現します。その他就職や事業等、何にでも応用できますが、病気の治癒にも著しい効果があります。この場合も「治る！」と言葉で思念するのではなく、すでに治って完全な健康体になっている自分の姿を喜びをもって描くのです。これは思念力を応用する一般の精神治療家の理論とは違いますから混同しないようにして下さい。

「必ず実現する」とか「必ず治る」という言葉を用いて反覆思念する方法には一面の真理があり、やらないよりはやる方がはるかによいのですが、「必ず実現する」という言葉の裏には「今はまだ実現していないけれども」という意味が含まれることになり、そのような想念が何となくつきまとって実現力が弱められることがあるのです。そして人間のセンスマインド——特に視覚はとかく〝現在のまだ実現していない状態〟にとらわれがちですから、ほんとにそうなるのかなという疑惑も生じたりして、結局意識に焼きつけられた実現へのストーリーが消されることになります。それよりもすでに実現してしまった光景を鮮明に描く方が意識に刻みつけられる度合が強くてもっと効果的です。あとは意識がストーリーどおりに事を運びますから疑惑さえ起こさねば忘れてしまっても実現します。ただし病気が治る場合、自然治癒現象が起こるか、それとも優秀な医師やすぐれた医薬品によって治るのか、如何なる手段がとられるようになるかは本人のセンスマインドは事前に知りません。したがって手段や方法は一切考えない方がよいのです。医師の手によって治すのも重要な手段の一つですから極端な精神主義者にありがちな医学軽視は禁物です。とにかくイメージを描いて意識にストーリーを刻みつけさえすれば、あとは自動的に意識がストーリーを展開してゆくのです。自然治癒現象が発生しない場合は適格な医師の手にかかるように仕向けられて、偶然に——ほんとうは偶然ではないのですが——すばらしい医師を発見するようになります。

この「心の映画法」は何にでも応用できますが、どんなにイメージを喜びをもって描いても実現しないという場合は、同時に別な事を考えて別なイメージをダブらせているからで、その場合は想念観察をして子細に分析することが必要です。ちょうどタクシーの運転士にむかって数名の同乗客が同時に別な行先を告げれば、運転士は混乱して走れなくなるのと同様です。これからみても想念観察の重要さがわかるでしょう。

「心の映画法」によるイメージを描く方法はアダムスキーの宇宙的哲学を理解するのにも非常に有効です。つまり「生命の科学」「テレパシー」等をマスターしたときの喜びに満ちた姿を描けばその方向へスムーズに向かうことになります。特にテレパシー、透視力等の超能力を開発しようとすれば、すでに開発されてすばらしい能力を発揮しながら他人を援助しているイメージを歓喜をもって描くことが大切です。ただし超能力の開発には相当な自己訓練を必要としますが、「心の映画法」によってこの訓練が正しい軌道に乗るようになるのです。

以上で望ましい物事を実現させる「心の映画法」なるものについて述べました。これはもっと早くお伝えしたかったのですが、私自身や会員の方々の実験の結果を集める必要があったために発表時期が長引きました。実証面は十分に重視してあります。

質疑応答

問　アカシック・レコードとは何ですか。

答　これは宇宙空間に満ちている想念帯です。一度人間から発せられた想念は消滅することなく、肉体、ソウルマインド、宇宙空間全体に記録されます。死者の生前の想念は物質の原子に記録されます。いわば写真の感光板のようなもので、一度ネガが作られると何枚でも同じ写真ができるのと同様に、このアカシック・レコードの読める特殊な能力者は他人の過去世や過去の歴史などを透視できるのです。

問　人間が生まれ変わる場合、実体（意識）が新生児の肉体に移行するのは平均三秒とのことですが、距離に関係なく三秒だとすればこの速度は三次元時空を超えたものとなり、一般の概念から飛躍しすぎています。これについてはどうですか。

答　生まれ変わる場合の実体移行の速度は〝意識による旅行の速度〟と同じで、これは想念波が空間を進行する速度と同じです。たとえば東京のAが大阪のBの姿を思い浮かべた瞬間にAの想念はBの所へ到達しています。したがってテレパシーの交信に時間は関係ありません。テレパシーが瞬時にして行なわれることは実験によって証明されていますから、これからみれば死者の意識が瞬時にして新生児の肉体へ移行するのも不思議ではありません。しかし想念がどうしてそんな速度で進行するかは現段階ではナゾです。

問　現代は歴史的にみて如何なる時代なのですか。

答　宇宙時代です。地球が太陽系連合の仲間入りをする時期が近づいており、今はその第一段階にはいっています。具体的に言えば、一九五二年十一月二十日にアダムスキーが砂漠で初めて金星人に会った時がその第一歩です。また思想的には善悪がはっきり分かれる時代でもあり、人間が意識的存在であることをはっきり認める人と認めない人とに分かれる時代です。しかも救世主たる多数のスペース・ブラザーズが他の惑星から地球へ到来する時代です。したがって一部の宗教界でとなえられているような〝世の終末〟説を信ずる人は、スペース・ブラザーズの存在を信じない人と同様に盲目的です。ブラザーズは地球人の心に大変化が起こることを望みながらやって来るのであって、地球は今や精神革命時代にはいったとも言えます。

問　日本人は土星人の子孫であるという点について詳細をお知らせ下さい。

答　これについては太古のミュー及びレムリア大陸の文明にさかのぼる必要があります。ミューとレムリアは先史時代に印度洋から太平洋にかけて存在した文明国ですが、レムリアはミューの植民地でした。またミュー大陸民族が植民地として後に開拓したのが太西洋に存在したアトランチスです。ミュー、レムリアも科学の誤用が原因となって海中に没しましたが、アトランチスも最後は原水爆で滅んで海中に沈下しました。アトランチスは白人種で、この種族は後にエジプトへのがれました。

ミュー及びレムリアは五大種族から成り、大体に黄色人種であり、強大な力を持っていましたが、後には権力が黒人種に移りました。現代のインド人はレムリア系統の混血種で、古代に宇宙船を所有していました。アトランチスはミューに侵略されてからは黄色人種の支配下におかれて一大抗争が展開しています。

日本人はミュー大陸系の黄色人種です。その源泉は太古に土星から来た人々です。精神的に高度な発達をとげた民族でしたが、長い年月を通

（四十頁へ続く）

改訳

空飛ぶ円盤同乗記（5）

ジョージ・アダムスキー●久保田八郎訳

●第6章 母船内での質疑応答

身じろぐ者もない一瞬の沈黙の後、指導者は立ち上がり、彼と一緒にいた全員も立ち上がった。指導者は少しのあいだ立ったまま両手をイスの背において私の目を深く見つめた。その凝視の中にたたえられた大いなる親切と憐れみの表情を決して忘れることはないだろう。それは祝福のようでもあり、同時に新しい力が内部にわき起こるのを感じたのである。

一同に別れの素振りを示してから彼は身をひるがえして部屋を出て行った。彼が離れてからもしばらく沈黙が続いた。

私はなおも言葉が出ない。静かに声を出して静寂を破ったのはカルナである。「私たちにとってもこの偉大な人の話が聞けるのはいつも一つの特権なのです」

慎重に言ったのだろうと思うが、土星人のラミューが緊張を解いた。「さて、あなたを地球へお送りする前に、あなたの心の中にあるかもしれない質問を発するための余裕が与えられています。必ずしも指導者が今話された深遠な問題に限る必要はありません」彼は微笑してつけ加えた。「あなたに興味のあることなら私たちにも無意味ではないでしょうから」

一同が席についてから私は感謝して彼を見た。今度は口頭で質問してもよいとラミューは言っているらしい。メンタル・テレパシーによらないで普通の会話になりそうだ。そこで心にあった最も気がかりな質問を

試みた。

「核爆発実験以来、多くの場所で発生した大気の状態の急激な変化は、あのエネルギーの解放と関係があるのでしょうか？」

「たしかにあります！」とラミューが答えて「これはただの憶測ではありません。私たちは〝知っている〟のです！」

私はゆっくりと言った。「たとい地球の戦争が他の惑星群に住む無数の人々の宇宙旅行を危険にするとしても、多数の利益のためだからといって少数（地球人）をきずつけるのは悪いとあなたがたがなおも感じておられる理由を、もう少し説明していただけませんか」

「説明しましょう」とオーソンが応じた。「生まれたときから全体というビジョンを吹き込まれている私たちすべてにとって、私たちが知っている宇宙の諸法則にそむくことは考えられないことなのです。この諸法則は人間によって作られたものではありません。それは始めからあったもので、しかも永遠に存続するでしょう。この法則のもとに各個人、民族、各惑星のあらゆる知的生命体は、他から干渉されることなしに自身の運命をきめなければなりません。相談するのはよいでしょう。教育もよいでしょう。しかし破壊に至るほどの干渉は絶対にいけないのです」

彼の問いたそうな顔つきは、原理がはっきりしたかと尋ねているように見えた。

火星人のファーコンが初めて口を開いた。「あなたは想念の力を理解しているでしょう。地球に対する私たちの有形の使命は別として、私たちすべては、地球人が不幸にむかって進んでいることにみずから目覚めるだろうという信念をしっかり持たねばならないのです」

「なるほど」と、心中で問題が明確になるにつれて私はゆっくりと言った。

「地球の兄弟すべてに絶えず送られているこの想念の力が多数の人の心を変化させたことを私たちは知っています」とラミューが述べた。

「またこんなこともわかっています」とイルムスが指摘した。「あなたや地球の多くの人たちが知っているように、地球の空軍（複数）や政府（複数）は、地球の空に見られる私たちの宇宙船が大気圏外から来ることを、しかもそれが別な惑星（複数）の知的生物によって作られ操縦されていることを〝知っている〟という事実です。地球の政府（複数）の地位の高い人々は私たちとコンタクトしてきました。そのなかには善人で戦争を望まない人もあります。しかし地球の善人でも長い時代を通じて地球上で人間自身によってつちかわれてきた恐怖から完全にのがれることはできません」

「地球の各地を飛んでいる飛行士についても同じことです」とカルナが静かに言う。「多くの飛行士が私たちの宇宙船をたびたび見ていますが、口を封じられて警告されているために、すすんで語ろうとする人はほとんどいないのです」

「それは地球の科学者にしても同じです」とファーコンがつけ加えた。

私たちの世界と人間に関する彼らの知識にまたもや私は驚いてしまった。「そうすると解決は街頭の普通人に大きくかかっていて、それが世界中の大衆によって増大されるということになりそうですね」と私は言った。

「大衆はあなたの力になりますよ」とファーコンが即座に同意して「ですから、もし彼らが各地で十分な人数でもって戦争反対を口にすれば、地球各地の指導者たちはこころよく聞き入れるかもしれません」

私はこの会話が自分の理解に非常に役立ったのを感じて希望に満たさ

れた。ほとんど自分でも気づかないで私は話題を変えて言った。「操縦室で見た機械装置——音を記録してスクリーン上で絵に翻訳するあれですが、それについてもう少し説明していただけるでしょうか」

「もちろん」とオーソンが言って「あの機械の最も重要な利用法の一つは、私たちがどんな言語でも容易に習得できるという点です。当然のことながら地球で実際に住んで働いている私たちの仲間は、そうでない人よりも巧みな口調で話します。ただし私たちもあなたがたと同様に、なかには他人よりもすぐれた語学の才能を持つ人がいて、直接に他人と接触しないで完全に話すことを学びます」ここで彼は微笑して、（彼と私との）二人の最初の会見時（注＝一九五二年十一月二十日、カリフォルニアの砂漠でコンタクトしたとき）に行なわれたパントマイム的な会話を思い出させて言い足した。「テレパシーによる想念内容を送受信するあなたの能力をテストするのが最も重要でした。その結果、あなたはこへ来ることになったのです！

コンタクトや円盤目撃の個人的体験という狭い枠を除いて、あらゆる方面に地球人の懐疑論があることは私たちによくわかっています。私があなたに差し上げたメッセージ（注＝パロマー台地へ飛来した円盤から投げ落とされた金星文字のメッセージ）が宇宙的性質のものであったのはこの理由のためです。あのような文字の解読力は太古に失われた文明（複数）とともに埋没したのですが、あれを翻訳できる少数の人が現在の地球にも散在しています。その翻訳を見せても絶対に信じようとしない人だけが、依然として信ずることを拒否するのです」

「でもよかったわ」とカルナが楽しそうな微笑を浮かべて言う。「少なくともメンタル・テレパシーが地球の科学者によってたしかな事実として認められてきたのですから！」

「おわかりですか」とオーソンが言って「私たちはこの数年間あなたを観察した結果、ついにコンタクトしたのです。しかもテレパシーに対するあなたの知識が十分なものであると確信したのです。これは私たちの（砂漠での）最初の会見における最後的なテストで立証されたわけです」

「何か他の方法で私をテストしましたか？」と私は尋ねた。

「たしかにやりましたよ！ あなたは数年間私たちの宇宙船を撮影し続けたのですから、あなたの想念は必然的に私たちの方へ向けられていました。そしてあなたの関心がまじめなものであることを感知したのです。それであなたが自分の関心をどのようにして行動にあらわすか、行手に必ず起こってくる嘲笑や疑惑に対してどの程度耐え得るか、また私たちとのコンタクトを自己拡張や金もうけに利用する誘惑にかられるかどうかという点が観察され続けたのです」

「あなたは空飛ぶ色光に関するあらゆるテストに合格したわけですわ」とイルムスがあたたかく言った。「あらゆる嘲笑や否定を前にして——あなたの写真の真実性が疑われた場合でも——心の中で真実だとわかっているその写真類をあなたが信頼し続けていた様子を一同は見ていたのです」

この激励は私を幸福感で満たし、こんな友がいれば如何なる挫折もあり得ないことを知ったのである。

「あなたの思慮と判断に関して私たちの知りたかったことがもう一つありました」とラミューが言った。「たとえば今夜指導者が洩らされた事ですが、その方がおっしゃったようにまだ地球人に知らせてはならない或る事柄がありましたね。地球のような世界では、他人の注意を引くような声明を発表することによって自分を重要人物にしようという大きな誘惑が大抵の人に起こります。しかも、現在あなたが洩らすことを許さ

れている事柄のすべてを人間知恵でもって万人に語ることは不可能です。これがあなたの良識の立ち入るべきところです。結局、あなたは自分で知った範囲内で宇宙の法則を教えることに生涯の大部分をささげてきたわけで、そうすることによって、他人に吸収されず理解もされないような知識を伝えることは無益であるのみならず、ときには危険でさえもあるということをあなたはよく心得ています。あなたがこの原理を、私たちから受ける知識に応用するつもりであることは私たちにわかっているのです」

「テレパシーに関することですが」と私は心中にあった一つの質問を発しながら「私はそれを応用することはできますが、実際にはその働きを理解しているとはいえません。少しそれを説明して下さいませんか？」

彼らは互いに顔を見合わせて笑った。そこにいるだれもが私の質問に答えることはできるのだが、他人にその機会をゆずるようにうながしている礼儀を楽しんでいるのだなと思った。実際、今までの談話をふり返ってみると、われわれの世界で二名またはそれ以上の人々が集まった場合に生じる雰囲気とは全然違うことに気づいたのである。私たち地球人は一グループに飛び込んで互いに誤解して話し合ったり、絶えず話し手に横やりを入れたりするのだが——話し手はときには少なくとも一つの会話の終りまで発言することが許されるべきなのに——、ここにいる男女は常に他人から妨げられることなしに話しているのだ。単なるむだ話の力によって発言権を保持する人などはいないのである。

一同の同意を得たかのように答えたのはオーソンである。

「あなたの世界ではラジオというものがあって、〝ハム〟といっている多くのアマチュア無線家がいるでしょう。彼らは用いることを許されている一定のチャンネルを持っています。あなたがたが〝エーテル波〟と呼んでいるこのチャンネルによって、或る場所の人はうんと離れた場所の別な場所の別な装置の所にいる人にメッセージを送ることができるわけです。この二人は同じ部屋にいるのと同じほどにはっきりと互いに声を聞くことができます。かつてこの伝達法は、私たちの宇宙船が別な惑星から来るという説を現在嘲笑しているようなタイプの心を持つ人ならばかばかしいと考えたことでしょう。この程度の知性の人にとっては、商品としてカウンターの上で販売されるほどにたしかなものにならない限りほとんど信じられないのです。

想念もラジオの場合とまったく同じように或る波長に沿って送受信されるのです。しかし機械装置は必要ありません。私たちは頭脳から頭脳へ直接に働きかけます。ここでもう一度言いますと、距離は障害になりません。しかしうまくやるにはオープンな受容的な精神が必要です。あなたが私たちに想念を送っていた年月中ずっと私たちはそれに答えていたのです。このため、一つのチャンネルで想念波を維持することによって両者間に固形のケーブルに似た連絡線が設定されていたのです。あなたの心がオープンでありさえすれば、ちょうど電話でメッセージを受けとるのと同じように、いつでも私たちはあなたに必要な情報を送ることができます。

あなたは自分の体験を確証するために選ばれて証人たちの面前で私と会いました。私たちはあの会見（砂漠での会見）の事実ができるだけ遠くまで広がることを望んでいます。そして勇敢にも最初の記事を掲載したあなたの国の或る新聞社のスタッフをほめたたえています。

しかし万人にはっきり伝えていただきたいことが一つあります。今までここで話してきたテレパシーによるコンタクトは、地球人の言っている〝心霊〟や〝降霊術〟的なものとは全然違うということです。テレパ

シーは一つの心から他の心への直接のメッセージなのです。いわゆる心霊現象については別な機会に説明しましょう。

このメンタル・テレパシーを私たちは送信者と受信者という二点間の〝意識が一体化した状態〟と呼んでいます。これは私たちの各惑星では最も普通に用いられている伝達法で、特に金星ではそうです。私たちの惑星では個人から個人へ、惑星から宇宙船へ——それがどこにいようとも——、そして惑星から惑星へメッセージを伝えることができます。前にも申しましたように——これは特にはっきり記憶していただきたいのですが——地球人の言う空間または〝距離〟は全然障害になりません」

オーソンが語っていたあいだ、イルムスがそっと部屋から出て行ったが、やがて数個のゴブレット（台つきグラス）の載っている盆を持って帰って来た。ゴブレットの中には私が以前に述べたのと同じ清涼飲料がはいっていることがわかった。彼女がグラスをくばってから私は言った。

「他の惑星から来て私たち地球人のなかで生活しておられるこの人たちのことですが・・・・このようなことは長く行なわれてきたのですか？」

答えたのはカルナである。「たいそう大昔からですわ！　そうですね、少なくとも」と彼女は訂正して「過去二千年間は続いています。地球人を助けるためにあなたの世界で生まれかわるように送られてきたイエスのはりつけ以後、地球で生まれかわるよりも関係者にもっと危険の少ない方法で使命を遂行するようにきめたのです。これは私たちの宇宙船の大発達によって可能になりました。肉体を持ったままで志願者をつれて来ることもできました。この人たちは使命を果たすために注意深く訓練されていて、個人の安全に関する教育を受けています。本人は正体を決して洩らしません。ただし一定の目的をもってごく少数の人に洩らすことはありますが、あなたはその一人です。

彼らは地球の兄弟にまじって言語や生活様式などを学びます。そして出身惑星へ帰って、地球で得た知識を伝えてくれます。私たちは七千八百万年にさかのぼる地球の歴史を知っています。地球人によって築かれた似たような歴史（複数）は、彼ら自身が破壊した諸文明とともに失われてしまいました。現在あなたがたをおびやかしているのと同じパタンの破壊があったわけです。

地球人が〝戦争〟と呼んでいる状態は、この太陽系では数百万年間も地球以外の惑星には存在しません。もちろんあらゆる惑星やその住民は低次から高次へと秩序正しい段階を通過しなければなりませんが、地球は秩序ある自然の進歩をしてなくて、むしろ成長と破壊、成長と破壊の無限の反覆です。

私たちの援助によってあなたの惑星を離れてしまった地球人（複数）がいますが、これは私たちから学び、やがて地球へ帰って自分の知識を同胞に伝えるためです。しかし今地球に存在する状態下ではだれも帰れませんから、これを行なうのはもう不可能です。その人たちが自分のいた場所を説明すれば、必ず狂人のレッテルをはられて精神病院に投げ込まれるだけでしょう。また、いろいろな種類の証明書が必要な現在の地球では、長いあいだ不思議な失踪をした人が突然帰って来たならば当局から問題にされるでしょう。私たちは仲間の人々を耐えがたいほどの迫害にあわせることはできません。以上の話で、私たちが長いあいだ援助しようとしている人々から逆に多くの方法で私たち自身が妨害されている様子があなたにはっきりとわかるでしょう」

このようなことを語るにつれて、カルナの表情にたたえられていた自然の快活さすべてが憂愁で消されていった。すると彼女は低いテーブルからグラスを取り上げてそれを一口飲むと、また微笑した。グラスを置

いて彼女は言う。「こんな悲しいことをお話しするのはたいそう残念です。——しかもこのような苦悩が宇宙のどこかにまだ存在するなんて、いっそう悲しいことですわ。他の惑星に住む私たちは悲しい人々ではありません。私たちはたいそう陽気です。とてもよく笑うのです」

この簡単な詫びの言葉に私はすっかり感動してしまった。彼らは各自の惑星にいて楽しいのだ。しかもすすんで地球の悲しみをともにしながら私たちに光明をもたらそうと長いあいだ絶えまなく努力をしているのだ。

「でもまだ私たちには一つの希望があります」とイルムスが私を激励するかのように言った。「私たちはまだ地球人の中へはいることができますし、ときどきあなたの場合と同様なコンタクトをすることもできます。現在は地球の飛行士たちは私たちの着陸を困難にしていますが、私たちの宇宙船を目撃する地球人がふえればふえるほど宇宙船を見なれて、他の惑星に人類が存在する事実を認めるようになり、地球人との個人的な会見もふやせると思っています」

「まったくそのとおりです」と私は同意した。

一同は各自のグラスを飲みほした。友人たちを見たとき、地球の状態に関する懸念の色はすっかり彼らの顔から消えているのがわかった。この気分転換は賢明で適切なのだと悟った私は、彼らの態度にならって尋ねてみた。「あなたがたの惑星ではダンスをしたり歌ったりしますか？また私たちと同じようにパーティーを開きますか？」

「ダンスはずいぶんやりますわ——だれもみな」とカルナが答えて「私たちはまとめられたリズミカルな運動による身体の訓練を教育の基本的な一部分として考えています。しかもこの表現法は、地球人なら宇宙人の宗教的儀式と言うかもしれないようなものの一部分です。言葉による詩形式が散文では不可能な深い感情をあらわすのと同様に、礼拝の舞踏として演じられる肉体の動きに表現される完全なリズムにもその感情が表現されるのです。

また私たちは地球人が踊るようにまったく楽しみのためにも踊りますが、あなたがたの現代の踊り方とは全然違うのです」と彼女は笑って続けた。「私たちが地球で観察したのですけど、蹴ったりゆすぶったり跳んだりして、そのあいだ男女が一瞬互いに荒々しくからみ合ったかと思うと、次の瞬間には振り離したりしますが（注—これは戦後に流行したジルバを意味するものと思われる）、あんなことをしても私たちは決して喜びを感じることはできません。私たちの社交ダンスは普通グループ単位でやります。もっとも、その場の気分で興が乗ったり音楽に刺激されたりすれば、一人または数人が皆の前で踊ってみせてくれることもありますけど——。あなたは地球で表現の巧みなダンサーを見たことがあるでしょう。そして内部の魂によってふるい起こされる肉体の美しい運動をながめるのは楽しいことを知っていらっしゃるでしょう」

「私たちはパーティーも開きますわ」とイルムスが言った。「ただしそれをパーティーという言葉で考えたりはしないのですが——。私たちが互いに語ったりくつろいだりするために各自の家へ友人を招待することはとても簡単です。こんなことは大抵戸外——海岸とか庭園で行なうのです。地球人と同様に私たちの多くの家には水泳プールや大きなテラスの付属している庭がありますわ」

私はこのすばらしい人たちと別れたくなかったが、ちょうどこのとき、ラミューが立ち上がって言った。「お気の毒ですが、もうあなたを地球へお送りする時刻になりました」

私は立ち上がって、残念な気持を「またこの次に」という思いの中に

埋めようと努力した。

和気あいあいたる中に別れの挨拶がかわされ、更に一同の再会が約束された。

私が今までに聞いた話の全部を記憶せよとか、地球上の私の活動にそれを適当に利用せよなどと言う人はいない。ただ最後の、美と善意と友情の印象とともに、無知という壁さえ取り除かれれば私の世界の人々も成長して全人類の有する天性を持つようになる知識を身につけて離れただけである。

操縦室に通じるドアーの所まで来たとき、私は立ちどまって、この美しい部屋の詳細な様子、友人たち、特に〝無限の生命〟の輝かしい肖像などをふたたび心にきざみつけようと振り返ってみた。

＊　＊

私が訪れていたあいだに小型機（円盤）はすでにチャージされて、地球への帰還準備が完了していた。ドアーが開いてわれわれは一緒に乗り込んだ。ラミューとファーコンと私である。ラミューが操縦席につく。階段を登ったときクランプとケーブルははずされていた。最後の人がはいってから以前のようにドアーが音もなくしまった。

ゆっくりとわれわれは傾斜したレールを滑降して、二個所のエアーロックを通り抜け、ふたたび船体の底部から宇宙空間へ出て行く。レールを降りるとき、またあの奈落に落ち込むような感じがしたが、今度はひどくはなく、母船内にはいったときよりも短時間である。

あっという間にドアーが開いてファーコンが言った。「さあ、また地球へ帰りましたよ！」

今度は円盤は接地しないで、地面から十五センチばかり離れて浮かんでいる。

ラミューがすすみ出て別れの手を差し出しながら言った。「私は機内に残らねばなりませんので、ご一緒に車には乗れません。今夜はあなたに会えてうれしく思います。近いうちにまた会えることを期待しています」

私も相手の気持どおりに答えた。

ホテルへのドライブ中は自分の心が感情と深い想念に満たされて終始無言であった。ファーコンはたしかにこのことに気づいていた。

彼はホテルの前で車をとめたが、車外へは出ない。二人は握手して、彼が言った。「いずれ近いうちにまた会うつもりです」

いつ、どこで会うのかと考えていると、彼がこの無言の質問に答えて言う。「適当なときにあなたに〝感じ〟を起こさせること、そしていつのまにか適当な場所にあなたが行くようになることを確信して下さい」

私は車から出た。別れの手を上げてからファーコンは、歩道に一人で立っている私を残して走り去った。

ホテルへはいって自分の部屋へ行く。友人たちと別れてから初めて時計を見た。午前五時十分である！

全然眠たくはないし疲れも感じない。ベッドの端にすわったまま私は一時間もその夜の体験を回想したが、それが心を通過してしまった後も、この出来事のすべてが同胞にとってどんなにばかばかしく思われるだろうかと思案しないわけにゆかなかった。だがやはり私はそのことを語らねばならない・・・・。

実際、私自身も過去数時間内に起こった出来事すべての真実さを信じ得ないほどである。しかし私は何をこの目で見たか、何をこの耳で聞いたかがわかっているし、たしかにそれがまったくの現実の体験であったこともわかっているのだ。

ついに服をぬいでからだを伸ばした。軽い眠りに落ち入ったのだろう。目が覚めたのは八時近くである。朝食をとって家へ帰るためのバスに乗る時間がほとんどなかったので、急いで服を着た。

バスに乗りながら私の肉眼は後方へ流れる〝地球の〟光景や、すぐ近くにすわっている人々を見たけれども、前夜の体験に夢中になっている私の心はなおも宇宙空間を旅行し続け、巨大な母船内で友人たちとともにいるかのようである。

それ以来、同時に二個所にいるような感じが数週間続いた。地球的な束縛に帰ることが非常に困難なのを感じたのである。宇宙の広大さとその不断の活動の美しさを見る特権を与えられた時間は短かかったが、その驚異は私から消えない。他の世界の友人たちから学んだ事柄のすべては私だけに与えられたものではなく、喜んで受け入れようとする地球人のすべてにわかち与えられるべきものである。

●第7章 土星の空飛ぶ円盤

他の世界から来た友人たちとの再会が行なわれないまま月日が過ぎ去ったが、しばしば彼らが近くにいるような感じがした。

二ヵ月後の四月二十一日である。私はふたたび例の都市へ行きたいという突然の衝動にかられた。そこで翌日手配をしてオーシャンサイドへ車で送ってもらい、そこからロサンジェルス行きの午後早目のバスに乗って、二時間と少しでその町に到着したのである。

以前と同じホテルで宿帳に記入してから自室へ行って旅の疲れをいやしてから階下へ降りて、友人のバーのボーイと少し話すためにカクテルラウンジへ行ってみた。しかしまもなく週刊ニューズ誌を手にしてロビーへ引き返し、そこで落ち着いて待つことにした。

今度は最初のときに私を悩ませたあの不安と胸騒ぎはまったくない。山（パロマー）からここへ私を引き寄せた衝動の意味はわかっているのだ！　それで少々〝言外の意味をくみとる〟ような調子で国内外の出来事に関する記事を興味をもって読んでいた。ほんの少し顔見知りの二人の男がはいって来て挨拶をかわしにやって来たほかはだれもいない。

ふと顔を上げると火星人の友ファーコンが立っている！

こみあげてくる微笑を思いきり浮かべてとしか言いようのない状態で飛び上がると、ファーコンも大きく微笑して、二人はいつものとおりの挨拶をかわした。続いて彼は或る言葉を発したが、それには明らかに或る特殊な意味が含ませてあるのだというふうに力をこめて発音した。

一緒にホテルを出ながら彼が言う。「握手のことについてはある程度説明しましたが、あなたと、そして地球であなたとコンタクトしている私たちの惑星の人々とのあいだで、もう少しはっきりした確認法として今お聞きになった言葉をつけ加える方が最上だと考えたのです。これはたびたびあることでしょうが、見知らぬ人があなたに接近する場合などには特に有効ですよ」

「すばらしい警戒策です」と私は同意した。続いて腕時計を見るとすでに七時十五分である。私は言った。「お差支えなければ、それに何か召し上がりたいなら、すぐ近くの小さなカフェーを知っていますが、そこならブース（仕切った小室）の中にすわって他人に邪魔されずに話ができます」

「それは絶好の場所です」と彼は言って微笑しながらつけ加えた。「と

にかく肉体も養う必要がありますからね！」

つれだって歩きながらラミューのことを尋ねると、今夜は来られないだろうとファーコンが言う。

カフェーは満員だったが、到着したときは或るブースの客が出ようとするところで、二人は運よく間に合ってその中へはいることができた。

テーブルを片付けに来たウェートレスと挨拶をかわしてから、彼女が差し出したメニューをファーコンはすばやく見て、かたわらに置き、ピーナッツバターつきの黒パンのサンドイッチとブラックコーヒー（注＝砂糖、ミルクなどをまぜないコーヒー）、それにアップルパイ一個を注文した。

「私にも同じものを下さい」と私は言った。

二人だけになってから彼は低い声で語り始めた。「あの週刊誌を読みふけりながら、あなたは地球のいろいろなグループが他のグループに対して絶えず持ち続けている大きな疑惑、敵意、憎悪などを慨嘆していらっしゃいましたね」

ファーコンの到着後はこんなことを意識的に考えていなかったので、相手が私の反応を知っていたことに少々驚いた。

「まったく簡単なことですよ」と彼は説明して「それはやはりあなたが〝心の背後〟と呼ぶかもしれないものの中にある非常に強力な想念ピクチャーなのです」と彼は続けた。「大抵の人は自分の内部にあるあのような破壊的感情がほんとうは何であるかを知っていません。——柔和な気性を持つことを誇りにしている人さえもそうです。しかも人間にかんしゃくを起こさせるにはほんのちょっとした事で十分だということを考えてごらんなさい。更に、もう少し悪化すれば本人は闘争の段階にはいり、〝自衛〟と称して侵略的になります。

実はこれはあらゆる理性を失ってしまう激情の力をともなう感情のアンバランスな状態にすぎません。だが一度悟りさえすれば、このような習慣的パタンは抑制されるかまたはまったく消滅させることができるのです」

このとき食事が運ばれてきた。二人だけになってからまたも彼は続けた。「今日地球に存在する事態の責任をどこかの国の少数者のみに負わせることはできません。地球の兄弟たちとの仕事や社交上の接触で、私はこの破壊的感情のしみ込んだ、利己主義でこりかたまった多くの人に会っています。当然、恐怖と混乱が広がるわけです。より多くの宇宙の法則を探求することによって同胞のより高度な考え方を発達させることに成功した人が少しはいます。また、なかにはいわゆる精神主義、神秘主義、その他これに類する名の手段を選ぶ人もあります。しかしこうした人のなかにさえも奉仕と相互の幸福という宇宙的動機よりも自分の拡張や個人的利益の方向にむかった利己的な動機がしばしばあります。

このような世間一般の利己主義の結果、大衆がだれを選ぼうとも、たとい大衆自身の階層から選ばれたとしても、ほとんど似たりよったりです。大衆が力を持つときは指導者も彼らの習慣に従うのですから——。

あなたがたのなかで気づかれないように生活してきた他の世界の私たちは、人間の神性がどんなに忘れられているかという現状をはっきりと見定めることができます。地球人はもう原初のときのような表現をした人間ではなく、それぞれ分離した生きものになっています。現在彼らは習慣の奴隷にすぎません。だがこうした習慣の中にも神性による表現にあこがれようとする本来の魂が閉じ込められています。この隠れた衝動は、習慣というメカニズムによって常習的行為や考えにつながれた人間を必ず根底からゆり動かします。だからこそ、人間自身が気づいている

以上にしばしば、人間の実体の奥底で生きている或る物が、より以上に美しく偉大な表現を求めながら、習慣でしばられている自分を不安な落ち着かない状態にしているのです。しかもこの習慣の集積は非常に強大なものですから、人間がこの親切な賢明な声を聞こうとしながらも、一方ではそれが自分をどこへ導こうとするかがわからないためにその声に従うことを怠るのです。しかし人間が自分の個人的なうぬぼれというカセから脱して、この声に自分を導かせるまでは、自分の生存の法則に反する戦士として生き続けるだけでしょう。

ご存知のように、人間は生き方を変えようとしない限り、救われるものではありません。〝無限なる者〟の法則をまじめに追求しようとする地球の少数の人々は、他人を導くように努力する必要があります。そうすれば他の世界の私たちもその人々を助けるつもりです」

ファーコンが話しているあいだに食事は長びいてしまったが、今彼はブースから立ち上がった。ふたたび外へ出て、約二ブロック歩いて二人は例のポンティアックをとめておいた場所へ来た。

風のひどい夜だが、あらしなどはほとんど気にならない。ドライブの始めのあいだ私の心はファーコンが語った内容をあれこれせんさくしていたが、終りに近くなって今夜はどんな新しい体験が自分のものになるのだろうかと、そればかり考えていた。今度の町からのドライブとしては以前にメーン・ハイウェーから急に横へそれた場所までが短いように思われた。今度は車がとまるまで短距離を走ったのである。

最初右手に二、三の低い丘の輪郭が見えるだけで、暗黒の中に私に見える限りでは四方に広がった平たい地形だけである。ふたたび円盤にでくわすように意図されているのだと確信したものの、それらしい形やその存在を示すような光は見あたらない。しかし相手は方向を確実に心得ているらしく、しばらく歩くと不意に丘の端へ来た。すると遠方に柔らかい一つの輝きが目についた。この輝きの方へ進むにつれて私の期待感は高まってくる。そして約四百メートルほど歩いた頃、見なれた円盤の外形が見えてきた。

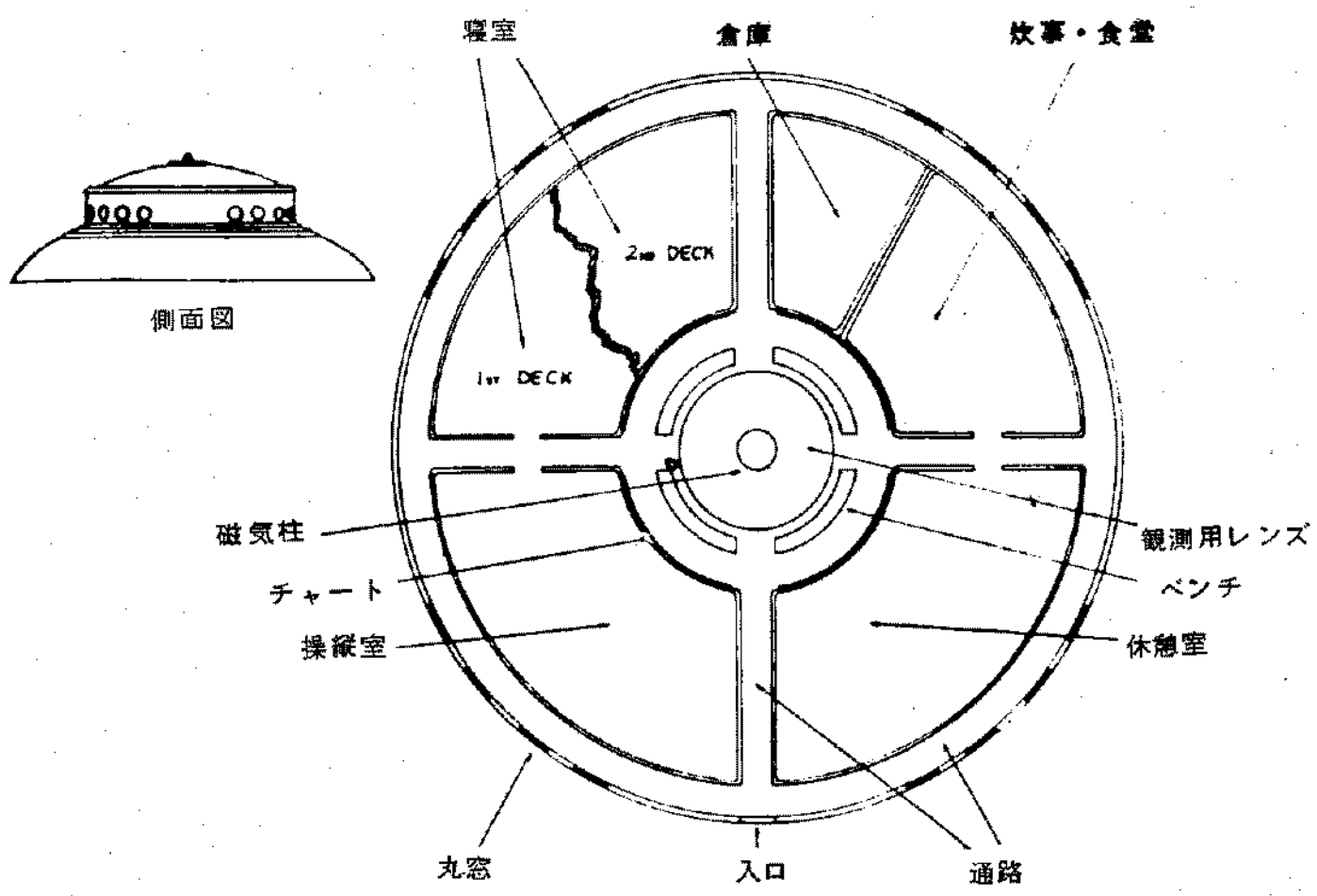
しかし、どこか違うようだ。私が記憶している小型円盤にくらべてこれはかなり大型である。この機体は直径が三十メートル以上あるにちがいない。丸窓（複数）も大きく、ドームはうんと平たく見える。機体の輝きを背景にして一人の姿が黒い影となっている。最初私は金星人の友と思った。例の見なれたスキー服タイプのパイロット服を着ている。しかしこのパイロットは見知らぬ人であることがわかった。身長一メートル八十センチばかりの美男子である。彼は二、三歩近寄って、例の握手をしながらあたたかい親切な態度でわれわれを迎えてくれた。この人をズールと呼ぶことにしよう。

この大型円盤は火星の宇宙船なのかなと思っていると、そのパイロットが私の考えを訂正して言った。「この円盤は土星から来たもので、これもあなたがすでに乗ったような大輸送船つまり母船で運ばれるのです」

彼はむきなおって、待機している円盤へわれわれを案内した。ドアーはすでに開いている。彼がはいり、私が続いて、うしろからファーコンが来る。

この機体の直径は金星の円盤の少なくとも四倍はあり、高さは二倍か、たぶんそれ以上もあった。ドアーがファーコンの背後で同じように音もなくしまる。すぐに内部のライトが強くなって、機械が始動すると低いブーンという音が聞こえてくる。かすかにぐいと引っぱられるような感じがしたが、からだのバランスを失うほどでもない。地球を離れたのだなと思った。初めて見る周囲の状況を精査しようとして見まわすと、土

〈図3〉土星の円盤の平面図



星人のパイロットがこの機体は小型機よりも大きいばかりではなく、他の点でも違うのだと説明した。これは地上の空間に浮かんでいたのではなく、三個の球型着陸装置でどっしりと接地していたのだ。私が感じたのは、地球から離れるために必要なジャーク（注＝急に飛び上がること）である。ズールがたとえとして磁石にくっついている鉄のかたまりをあげた。ジャークは分離の瞬間に起こるのである。

あたりを見まわすと例の見なれた青白い拡散ライトと、（金星の円盤の場合と）同じ種類のガラスのような半透明の金属の壁（複数）が目についた。二つの壁をはさんで幅約一メートル二十センチの曲がった通路があるが、これは機体をとりまいているらしい。この通路の外側の壁に一連の丸窓があるのに気づいた。小型機の窓よりはかなり大きい。私が見た上から判断すれば、この丸窓群は全部で四群ほどあり、一象限（注＝円型機体を四等分した一部分）に一群の丸窓があるらしい。

前方には見たところ同じ幅の通路があり、ドームまでとどく高い壁にはさまれて、機体の直径の三分の一ほど直線に伸びている。その先には中央室があるらしく、その室の中に一本の大きな磁気柱が機体の中心部に立っているのが見える。

するとパイロットが、飛行しているあいだ内部を歩きたくないかと尋ねた。歩きたいのはいうまでもないことだ！　先導しながらズールは私を中央室へ案内した――驚くべき光景である！　初めて見たあとでこうまで不思議な複雑な物を語るのは困難であるが、とにかく最善をつくすことにしよう。（上段の図を参照）

この機体の平面図は車輪に似ている。四本の通路は四本のスポークのように今われわれが立っている中央室へ続いていて、この中央室が車輪のこしきに相当する。各壁は床から天井へかけて六メートルから九メー

トルに及んでいる。各壁のほとんど全体が照明されたグラフ、チャートなどで覆われており、その表面には各種の線や幾何図形が、金星機の内部で私を魅了したような絶えず変化する色光でもって複雑な模様を織りなしているのだ。この美観に私はまたもうっとりとしたが、やはり正体を理解することはできなかった。

円形壁の中間あたりの高さに美しい金属のパルコニーがぐるりと走っていて、ハシゴがついている。壁の上方には半透明のドーム自体があり、巨大な観測用レンズが設置してある。床面のほとんど全体が同じような大レンズでふさがれているが、これは少なくとも金星機のレンズの直径の二倍はある。この周囲に四つの曲がったベンチがあり、観測者はそれにすわって宇宙空間をとおして下方の惑星を見おろすことができる。しかし床からドームまでとどいている中央の磁気柱が室内全体を威圧していた。二個の大レンズを貫通しているこの巨大な無言の力柱こそ、われわれが求めてやまない秘密——惑星間飛行の秘密を持っているのだ。

すでに指摘したように機体は四つの放射状通路で四等分されており、この通路が四つの入口から中央室へ通じるのである。左手へまわって、われわれはその通路の一つを歩いてみた。その全長のまんなかあたりで通路の両方の壁に互いに向き合ったアーチ型の入口が両側の壁に二つある所へ来た。パイロットは右側のアーチの下を通って機体の一部分へ私を案内したが、それは乗員の寝室だという。この室内は興味ある方法で区分してある。目の前には約十二の小さな個室すなわちキュービクル（仕切りのある小寝室）があり、そこで各乗員が別々に睡眠をとるのである。私はそのどれにもはいらなかった。すべてのドアーが開いているので、その完全なコンパクトな設備を見ることができたからである。地球のプルマン式寝台車製造技師たちがうらやむような設計なのだ！

手すりのついた一種のハシゴが寝室のすぐ上の層につながっている。思うにこれは機体の四つの区分のなかで一区分内が完全な二層になっている唯一の部分なのだろう。上層の室は一種の共同寝室または休憩室になっていて、そこには寝イス、ゆったりとした心地よいイスなどが置いてあり、ここで乗員は休憩したり話し合ったりできる。この部屋の天井は全体が半透明のドームの傾斜そのままで、これを見て夢心地になりそうな日光浴室を思い出した。外部の星や宇宙空間の見える曲がったガラス状のドームの下にいれば、たしかにそれはすばらしい憩いの方法だろう。

このようなことを理解しながら乗員は何名いるのだろうかと考えてみた。「普通は全部で十二名から成っています」とズールが言って「しかし今は私以外に二人しか乗っていません。こんな短距離の飛行にはこれ以上の人員を必要としないからです」

そのとき私は考えた。これは土星機なのだから、この特殊な乗員は皆土星人なのだろうか？　この想念をズールが訂正して言った。「この円盤は土星で建造されたものですが、特定な惑星が所有しているのではありません。各惑星人が共同で使用します。その結果、この乗組員はあらゆる惑星から来たメンバーで構成されているのです。

ごらんのようにこれは大型機で、長距離飛行用として作られています。再チャージしに帰ることなく一週間もしくはそれ以上も母船から離れていることができますが、それはこの円盤がこの目的を果たすためのエネルギー発生装置を機内にそなえているからです。非常事態が発生した場合は、再チャージ用の補充エネルギーを母船から各円盤へ直接にビームで送ることもできます」

二人が寝室付近の通路に立っていると、足元にかすかな振動を感じた

ような気がしたが、ズールが次のように説明したのでその理由を了解することができた。「機械装置類のほとんどはこの部分の床の下に仕掛けてあります。そこには寝室から直接はいれる工作室もあります」私はドアーを探したが何も見あたらない。だが格別驚きはしなかった。

二人はふたたび通路へ出て、隣接する四等分の一つに通じるアーチをのぞき込むと、色光（複数）の柔らかい輝きや奇妙な装置類が目についた——操縦室なのだ。操縦盤の所に二人の若い男がすわっている。われわれは歩き続けて、やがて外側の曲がり通路に出た。

右に折れるとズールが言う。「この室内には二個の小さな遠隔操縦の〝記録用円盤〟を保管する小室があります。この記録用円盤は接近観測用に発射されるものです。すごく敏感な観測機で、発見した事を円盤ばかりでなく母船にも伝達しますから、記録のコピーを作ることができるのです。これは特殊な情報を必要とする人の要求に応じて惑星に関する永久的な記録となるのです。この極小型円盤は地球、太陽系全体、別な太陽系などの諸状態の知識を得るのにずいぶん役立っています」

見学を続けながら外側の通路を歩いていると、われわれは四つの大きな丸窓の所を通りすぎたが、立ちどまって外を見るようなことはしなかった。

次の放射状通路の所へ来たとき、二人はふたたび右に曲がり、同じ半透明の固く見える二つの壁のあいだを通って機体の中心部へ引き返し始めた。これらの壁は非常に厚く、堅固で、車輪のスポークのように完ぺきな構造になっている。右側の壁が寝室の後壁にあたるらしいことがわかった。ズールの説明によると、左側の壁にはかなり大きな倉庫へ通じる入口がついていて、その中には長距離旅行にそなえて食料その他の必需品が貯蔵されているという。

長距離旅行という言葉をパイロットが発したとき、この円盤は母船の助けをかりないで惑星間を飛行できるのかと思ったが、彼はこれを否定して、円盤類は遠い宇宙空間を（自力で）飛行するように作られているのではないと述べた。

二人はまたもやフラッシュのきらめく可動性の壁グラフ類のある中央室へはいった。われわれは中心のレンズの端を通って三番目の放射状通路にはいった。まだ見てない最後の通路である。逆方向の通路の場合と同様に、この通路にもまんなかにまず二つの大きなアーチがある。まず向きを変えて左手のアーチから室内へはいったが、これは彼らの調理室だという。だが私には到抵そんな部屋とは思えない。というのは、われわれの台所に似たところがほとんどないからだ。単調な壁にかこまれた、からっぽに近い部屋だが、その表面の様子は擬装であることがわかった。ズールの話によると、この壁（複数）は天井から床まで食器棚や仕切り戸棚などがならんでいるのだが、驚くべき構造の円盤のあらゆるドアーと同様に、開かれるまでは目に見えないのだという。この戸棚類の中に食料品やその準備に必要なあらゆる物がしまい込んであるのだ。

ガラスのような小さなドアーが、オーブンだと彼が言う物の方へ続く壁の一つにはめ込んである。中をのぞいてみたがバーナーらしいものは何も目につかない。するとズールが説明した。「私たちは地球人がやっているような方法で料理をするのではありません。放射線すなわち高周波で急速にやってしまうのです。これは現在地球で実験されている方法です。しかし私たちは食物のほとんどを〝生きている〟状態で食べることを好みます。そして私たちの惑星に豊富にあるおいしい果実や野菜などをおもに食べています。あらゆる点で私たちはいわゆる〝菜食主義者〟ですが、まさかの場合に、ほかに食料が得られないときは肉も食べます」

後になってから、台所の流し、くず物処理器または水道設備などが見えないのに気づいたが、私は主婦ではないので、このときはそんな物がないのを気にとめなかったのである。しかし、たしかにこれらの器具はあるのだろう。たぶん他のあらゆる物と同様にわれわれの設備とは想像もつかないほどすぐれているのだろう。イス、テーブル、ベンチなども見あたらない。たしかに、必要な物は何でも壁と壁とのあいだに隠されているのだ。

二人は調理室を出て休憩室へはいった。金星の母船の休憩室と同じくすばらしく華麗な部屋である。各種のスタイルの長イスや一人用のイスなどが散在している。ほどよい位置に透明な台のついた金星船のと同じ種類の特殊なテーブル（複数）があった。それらの上には小さな美しい装飾がほどこしてある。目標惑星の大気圏内を観察飛行しているあいだは、乗員たちはこの部屋で多くの時間をゆっくりとすごすのだとズールが言った。また、地球人と同じように彼らはここで多くのゲームをやり、それを心から楽しみ、客人を歓待するのだとも説明した。

書物、書類、その他の読みものなどは見あたらないし、この種の物を保管するような棚やケースも見えないが、このような物が存在することはまちがいない。

室内の敷物は機内全体と同様、黄グレー色である。そのなかには模様はなく、表面はきわめて固そうに見えるが、歩いてみると厚いスポンジラバーに似た感じがする。

われわれはこの魅惑的な休憩室にほんの少しいただけである。中央廊下へ引き返してから最初に機体内へはいった通路の方へ歩き続けた。

このすばらしい宇宙機の中で実に多くの物を見せられ説明されたが、操縦室はちらりと見ることしか許されず、各機械装置を動かすパワーに関しては説明されなかった。彼らは宇宙空間の自然の力（複数）を利用して原動力に変えながら宇宙を飛行することはわかっているのだが、その〝方法〟は理解できなかった。だが私が知識を求めていたことはまちがいない。

しかし申し訳なさそうな微笑を浮かべてズールが語るには、一定の物事を洩らすほどにはまだ十分に地球人を信用できないのだという。「なぜなら」と彼は言った。「あなたがた地球人は感情を支配することをまだ知っていませんので、どうにかすると考えるより先に言葉が口をついて出るからです。そうなると、悪用するかもしれないくだらない人間にむかって無分別に知識を伝えないとも限らないのです」

私はこれが真実であることを否定できなかった。

私の機内の見学歩きは急スピードであり、さまざまの説明はその途中に与えられたのだが、それにもかかわらずわれわれの遊歩が終わるか終わらないうちにズールが知らせた。「私たちは母船に到着しています。これから船内へはいるところですよ」

飛行距離については彼らは何も言わなかったが、以前に金星の母船が静止していた位置よりはこの母船ははるかに地球を離れていると確信した。円盤の中央部に近い所にいたので外が見えないため、円盤が大母船にはいる光景は見えない。多くの点で前回の体験に似た感じがするが、同時に、説明のつかない相違があった。

待機している母船の内部へ下降するとき、またもやエレベーターで降りるような感じがしたが、からだのバランスを失うほどではない。

円盤がレール上で静止するとドアーが開いて、以前の金星の母船にあったようなプラットフォームへ出たが、だれもわれわれを迎えに出ておらず、したがって金星の母船で行なわれたように円盤に対してフランジ

（縁）とレール上にクランプを取り付けることもされない。

この円盤から出て、土星から来たこの輸送船内のプラットフォームに降り立った私は、この母船が金星のそれにくらべてほとんどあらゆる点で相違していることにすぐ感づいた。一体どんなめずらしい体験が私を待っているのだろうと思ったが、恐怖感は全然起こらなかった。

実際、他の世界の人々と新たに会うごとに、恐怖心を起こすことがまったくばからしくなるだけである。彼らの知恵の言葉を聞き、その美しい宇宙船を見せて乗せてくれた特権に対して、私はいつも非常に謙虚な気持でいた。彼らが私に頼んだのは、彼らの知識を地球のすべての同胞に伝えてくれというだけである。私はそれを実行するつもりだ。信じるか、信じないか、高度な知識から恩恵をこうむるか、それとも嘲笑と疑惑の中にその知識を投げ捨ててしまうか、それは各人にまかせよう。

（第七章終り。以下次号）

（二十五頁より）

じて鋭敏な感受性を失い、特殊なカルマを持ちながらもそれに気づかなくなり、数千年前には自然界の物質を神秘化する傾向が強くなり、それが極端になって、山や大地に神霊が宿るという思想を持つようになり、仮空の神々を創造するようになりました。全国に無数に存在する神社がこれを物語っています。これは誤った信仰であり、原初的な土星人の思想からはずれています。日本人は仮空の物を実在視し、神秘化する傾向の強い民族なのですが、一方、現代において白人の物質文明に毒されているのはカルマの清算のあらわれです。

問　先号のGAP哲学講座の中で、良いオーラを放つ音楽としてブルックナーの交響曲第八番とモーツァルトの「フルートとハープのための協奏曲」があげてありましたが、これ以外に良いオーラを放つ曲があれば教えて下さい。またグリーンのオーラを放つ曲は何でしょうか。

答　右の二曲があらゆる作品のなかで最高というわけではなく、良いオーラを放つ曲は他にも沢山あるようですが、そのすべてを聴くわけにもゆかず、二、三の例しかあげられません。X氏によれば、ベートーベンの作品は一体にオーラの色が暗く、せいぜい良いのは「田園」くらい。モーツァルトの作品は全体によろしい。グリーンのオーラを放つものとしてはヨハン・シュトラウスの「美しく青きドナウ」「春の声」「ピッチカート・ポルカ」など。チャイコフスキーの「白鳥の湖」もグリーン系。要するに芸術的価値とオーラの色とは必ずしも一致せず、したがってポピュラーな曲でも明るく清純な内容ならばオーラはよろしい。病人によい影響を与える音楽としては大編成のオケよりもバイオリン、チェロ、クラシックギターなどの静かな独奏曲がよろしい。ただしこのような音楽を聴けば病気が治るという意味ではありませんから誤解なきように。また植物は大体にグリーンのオーラを放つので、病室に鉢植の植物を置くのもよいことです。ロック音楽のオーラは悪く、特にエレキギターの音色は病人に悪影響を与え、これを妊婦に聴かせ続けると異常児が生まれたり流産したりするおそれがあります。大体に妊婦はいらいらした分裂感情を起こすと胎児に良くない影響を及ぼすのであって、出産まではなるべく騒音のない静かな場所で心を平安に保つことが大切です。その意味で胎教（胎児によい影響を与えるように妊婦が心や行いを正しくすること）は必要です。

科学トピックス

花にも喜怒哀楽

ソ連の心理学者ら実験

花は不安や怒り、喜びや興奮を感じることができるか・・・・風変りな実験に取り組んだソ連の心理学者らの答えは「イエス」。まだ仮説の段階だとはいうが。

二月二十五日（今年）の「社会主義工業」紙によると、心理学博士V・プーシキン氏らの行なった実験は次のようなものだという。

催眠術師が被験者を眠らせ、楽しい言葉または不快な言葉を話し続ける。被験者に喜びや悲しみの感情を起こさせるわけだ。被験者から少し離れて置かれたゼラニウムの葉に脳電計を接続すると、脳電計には、植物内部で被験者に似た感情の動きのあることが表われた。

このことから、植物細胞と神経細胞内で起こる過程には何らかの共通性があると推測でき、人間の心理、視覚、記憶等々は基本的には、植物細胞のレベルで発生する情報サービスの特殊化されたものといい得る。

プーシキン博士は「植物に感覚の存在することはこれまでたびたびいわれてきた。この仮説によって、植物細胞の反応から人間の脳細胞の機能解明への手がかりを得られよう」といっている。

植物にも心があるか、という問題は、現在の神経生理学の常識からはずれたものだが、ソ連やアメリカでは、この方面の研究が結構大まじめに取り上げられている。

三年前にも、ソ連農学アカデミーのイシドール・グナール教授らが、植物も人間の神経電流に似た電気信号を出すことを確認し、記憶力などを持つと発表している。

アメリカでは、親切に話しかけられた植物は、よく育つ、といった研究まである。

記憶や感情は、神経細胞の働きによるものと考えられ、動物のなかでも、かなり高等にならないと「喜び」とか「不安」はないというのが定説。神経細胞のない植物に〝心〟があるとなると、別の神経作用を考えなければならない。

しかし、それは、これだけの実験では、まだまだ不十分。植物生理学の研究で、植物には、外部からの刺激に対して反応する「興奮電流」があることは知られ、ハエトリ草などには、短期的な記憶に似たものがあることはわかっているが、たくさんの細胞の電気的状態が統合された神経作用はみつかっていない。

プーシキン博士が、植物に送り込んだ人間の脳波にしても、どこまで精神作用を反映したものかもわからない。（朝日四八・二・二七夕）

火星に大量の水

マリナー９号が確認

米航空宇宙局（NASA）は十一月十二日（昨年）、火星の人工衛星マリナー九号による一年間にわたる観測の結果、火星に関する人類のこれまでの理論はすべて書き改められたと発表した。

マリナー九号は昨年五月ケープケネディーから打ち上げられ、同十一月十三日、火星をまわる軌道に乗ったが、今回のNASA報告はその一周年記念日に発表されたもの。

これによると、火星の表面にはかつて水が自由に流れていたことが発見された。また現在も火星には大量の水があり、極冠の形で閉じ込められている。マリナー九号はまた、大きな火山の上などに、氷の粒を含むと考えられる雲を見つけた。マリナー九号が地球へ送ってきた写真には、火星の赤道の部分にある全長四千キロメートル、深さ六千メートルにも達する巨大なクレバスが写っていた。火星表面の温度は赤道で四度、極冠の部分で零下八七度である。

マリナー九号は火星を六百九十七周したのち、今年の十月二十七日に地球へ信号を送るのを停止した。NASAでは火星に生物がいるかどうかを調べるため一九七六年に無人探測器バイキングを打ち上げるが、マリナー九号はその先駆者としての役割を果たしたと述べている。

マリナー九号は無線が途絶するまでの六百九十七回の火星旋回中に火星表面の写真を七千三百二十九枚地上に電送した。同探測器は今後も火星を回り続け、約五十年後に火星表面に激突するものとみられる。

水の存在のほか、同探測器で判明した要点は次の通り。

◎ ある火山の直径は地球最大の火山の倍もある。

◎ 砂あらしは、秒速五十メートルを超える速さで吹いている。

◎ 火星の北極の気温は平均セ氏零下九三度で、地球の南極の同零下五一度より低い。

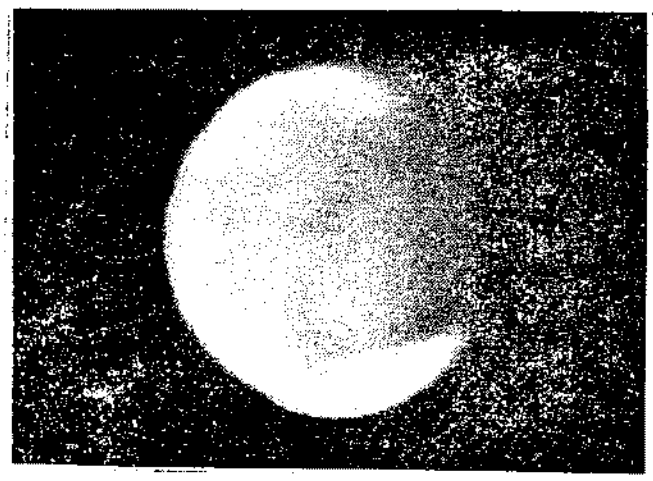
やはり生きている？

昨年十一、十二月に火星を回る軌道に乗ったソ連の火星二、三号が「水の存在」を明らかにし、米国のマリナー九号もそれを正式に確認、「火星は生きている」という説がますます強くなった。

地球から見た火星の白い極冠がドライアイスでできているのか、それとも氷かの論争はこんどの観測によって「氷もある」ことに落ち着きそうだ。分光計などで火星大気中に水蒸気を見つけたことだけでなく、火星表面にかつて水が流れていたことを示す地形的な証拠も見つかり、火星の火山活動の跡とともに貴重なデータとなった。

火星の水の量は「水による浸食」がかつてあったという意味では「大量」であり、また極冠に閉じ込められている水も、従来の予測にくらべれば「大量」とみられるが、ソ連の火星二、三号の観測によると、「火星大気中に含まれている全水分が雨となって表面に降ったとしても、人間の髪の毛一本ほどの深さにしかならない」という。

火星に水が存在することは、そこに「生命」が存在する可能性を暗示しているが、科学者たちは「生命があったとしても、細菌以下の原始的なものだろう」といっている。（朝日四七・十一・十三）



写真は火星

声

昨十四日GAPニューズレター五十一号無事到着いたしました。すばらしい内容で全く読みごたえがあります。重ねてお礼申し上げます。

さて多忙にまぎれて仲々お便りも出来ず申訳ありません。最近はサッパリ変ったニューズもなく、まあ平穏無事といったところです。先般職場の旅行ではじめて伊勢神宮方面に出かけましたが、伊勢も観光ズレがしてサッパリでした。やはりGAPの会合とか、オーディオのパーツあさりとか、ちゃんとした目的のない旅は魅力にかけるようです。

さてGAPニューズレターにお書きになっておられた超能力者X氏の音楽論は非常に参考になりました。先般FM放送で海外の放送局録音のテープでブルックナーの作品（交響曲何番かド忘れしました）が流されており、非常に印象に残ったので、これはやはり大したものだと思っておりましたが、間違いなかったわけですね。やはり波動のよいクラシック音楽はきくべきですね。近いうちによい指揮者のものがあれば第八番を入手してみましょう。それにしても音楽にもオーラが見えるとの説、実に興味があります。次に個人個人の生まれかわりの過程というものも、わかれば一度は知りたいものです。とにかく科学万能の現代、こういうことを言うと気はタシカかなと思われるのがおちの昨今、まずは自己の過去を知り、有意義に将来を生きるというのも決して損はないと信ずるのですが・・・・。次に最近はまた昔の白熱球が使われ出したというのもちゃんとした理由が存在したわけですね。小生方も裸電球にて方々ケイ光灯と交代もしくは共存させております。小生方のは主としてチラツキが眼にこたえる理由からでしたが・・・・。時に会費をお送りせねばと思いながらつい御無さたしておりますが、近いうちなんとか致します故おゆるし下さい。本は文久書林方に速達でステックリングの書を注文いたしました。どうも矢も盾もたまらずといったところです。ロドファー夫人の円盤を見たいのですが、実に残念です。（山口県　増野兼弘）

秋もすでに去り、ますます冷え込みのきびしくなる今日このごろですが、お変りございませんか。まだ僕は一度もお目にかかったことのない久保田先生ですが、いつかお会いできる日を楽しみにしております。今は福島県の郡山市に下宿しておりますので、東京は比較的近く、例会にもぜひ出席しなくてはと思っております。

僕は小学校以来時々たいへん僕をひきつける魅力を持っている人たち（ほとんどが小学校の同級生ですが）に出会い、僕自身もそのような人間になりたいと思い、努力しているのですが、なかなかうまくゆきません。その人たちはいつも高揚した気分でいることができるのでしょう。いつ見てもたいへん楽しそうなのがよくわかります。僕も日に何度となく、ちょうど波がやってくるように高揚した気分になったり、またそうでなくなったりしていて、できる限りその高揚した気分を永続させようと努力しているのですが―。

気分が高揚している時にはたいへん晴れやかで、まわりのものすべてが空間までも僕と同化したように感じます。それにまわりを歩く人たちにも〝喜び〟を直接印象で伝えることができるようです。実際に高揚した気分の時とそうでない時との他の人の僕に対する様子の違いは、その人と話をしなくても驚くほどよくわかります。また高揚した気分の時は、自分でも信じられないほど体が軽くなったように感じ、そうでない時のあの重々しい足どりとはうって変わって、まるででこぼこ道もクツ底にぴったり合ったように気にならず、宙を歩いてでもいるかのように進むことができます。全く、高揚した気分の時とそうでない時の僕は別人のようで表情までが違って見えます。

それで高揚した気分でない時に人に接すると、まったく人にある喜びを（もちろん印象で）伝えられないようでがっかりします。

ある友人は高揚している時の僕といっしょにいると、たいへん気持が落ちついてくるなどと言ってくれます。何とかしてあの高揚した気分を永続させられないでしょうか。本当にちょっとした機会で波がおしよせるように気分が高揚するのがわかるのですが―。

ではいつまでも御健康をおいのりしています。

（福島県　奥野正人）

総会は盛況でした。一億人の中から数百人の超能力者のタマゴが集まったわけですが、全く愉快でした。私はGAPよりも発明協会々員としての活動の方が活発でしたが、それでも過去私が独力で築き上げた思考論（のようなもの）が基本的にG・アダムスキーと一致していたのには全く驚きました。反面、強固な自信を持つようにもなり、実際にそのいくつかを日常でもつかっています。やはりその時々を最大限に能力をしぼり出して活動すれば道が開けてくるのは先生が日ごろおっしゃっているとおりです。

私がGAPに入会したのは全くの必然であったように思います。過去熱中したのは将棋、ピアノ、天文学の順で、最後に〝葉巻〟が出てきたのです。過去一度だけ不可解なのは、高二のとき葉巻を見て約二ヵ月後に引越をしたのですが、そのときの丸通の運転手がどうも宇宙人のような気がしてならないのです。その理由として仕事に対し非常に熱心で、働くこと自体に絶大な喜びをもっている。そのときの料金がわずか五百円であり、当時の相場が千二百円ないし千五百円だったことからしてもおかしい。しかも金を払うときに五百円でなくても千円でもよいと笑いながら答えたこと自体、運転手としては少々不可解だし、ビジネスなら正確な金を言って、もらったらさっさと立ち去るはずである。目のするどさが異常なほどである。私自身の性格として優秀な人間に相対したとき、非常なライバル意識をもつことが多い。つまり久保田先生や市川氏、橋本博士etcに対し無意識にそうなるのだ（明らかに周囲の雰囲気を悪くするので極力押さえるようにしているのだ

が）。そのときもあやうくそうなるところだった。以上の理由です。そして私自身に影響を与えるような事件はよくおぼえているし、その中に含まれること自体変である。運転手に対してライバル意識をもつことは普通考えられない。先生の意見をお聞きしたいと思います。

総会で先生を明らかにやっつけようとしてニューズレター五十一号に関する質問をしたのは×××の一人です。今の学生、特に極左、右翼の人達にある性格の特徴ですが、自分に気に入らない思想データを無理矢理まっ殺しようとする態度であります。各自考えていることが全ては正しくないということは常識でもわかるはずです。もし正しいなら自分の書いたテストの答案がすべて百点になるはずです。思考の実際として「もしも」「または」「しかし」や、その想念の性質を長所、短所、疑問視した所、可能性、関連した想念etcに分類して、そのあとで推理してみれば、その想念や背景、また自分の考えつかなかったであろう点や、不明な個所が明確にわかるはずです。（善悪と分けるのは主観がはいるのでダメ）もちろん個人差、問題を発展させる方向などが人によって異なるのは当然ですが、自分のことをタナに上げて人の欠点だけを誇大に言うのは、はなはだ心外であります。まるで自分が思慮分別のない無能かつ危険人物であると証明するようなものです。私個人としては久保田先生がどのように反応するかを興味深く拝見したわけですが、市川先生や私のうしろの若い人などががんばったせいもあって少々不満でした。

私個人としては傍観者でした。会員としては意地悪かったと思いますが、先生の態度が立派であったのは言うまでもありません。母親または前生からの続きかもしれませんが、傍観者というのは私の気に入りの態度です。その場ではやはり若干の影響は受けるので、単なる記憶（または記録）だけを取り、残留想念が体外に出てからゆっくりと考えることにしているのです。したがって、ほとんど間違いませんし、むしろ将来のために学習になります。以上が例の事件のまとめです。

橋本先生の実験はG・アダムスキーやGAPに役立ちました。ただ博士自体がやや独善的な解釈をしているのが気になりました。空想と現実をはたしてどの程度明確にしているか少々疑問です。GAP会員にしても超能力とは何か？という問いに対し、共通点はあるにしても、いろいろな答が返ってくると思います。一般の人にくらべるとはるかに正確ですが。GAPには〝久保田〟というバイブがあるので会員に生じる混乱は少しぐらいですみますが、他の団体では共通の理論及び指導的立場の人の理論がどうしても主体になるわけで、末席の人がたまにすばらしい想念を感受したとしても、どの程度の賞賛が得られるか疑問です。しだいに組織が固まってくるとトップの考えだけが幅をきかすようになりますから、この点に注意して彼らや橋本先生の理論を考えてみるべきではないでしょうか。グループや思想の極端な例としてナチスその他の政治団体があります。全学連や社会党がよい例です。みずからの理論に心酔するので選挙に勝てないでいる。理論の過大解釈になっている。一つの理論で人間を百パーセント理解できたことはないので、各自みずからの限界を見極めないと、とんでもないことになる。

社会の各自が属しているセクトと各自の体験などから、その考え方、行動等はまさに千差万別で、ある特定のグループの特定の考えを全体にあてはめようとするのは無茶であり、どうしてもというなら全体の洗脳が必要になる。それでもはたして何世代持続できるか疑問である。

とにかく話がそれましたが、橋本先生の実験データにしても、正しい解釈が得られているのか、その程度が問題だと思います。同先生が周囲の想念のあるパターンだけを好んで吸収していることも考えられます。ただGAP派の解釈としてはすばらしいことで、アダムスキーや発明家達の言動を支持できると思います。GAP代表としての久保田先生の異常なまでの注意深さ、日常の態度、情熱を完全に支持するものであります。

私個人としては発明家になろうと考えていますが、親が医者になれというし、一応どちらにしてもGAPに接したこと自体、大転換になりました。奉仕できればそれで十分です。できればGAPを経済面でも強力にバックアップしてゆきたいと思っています。今生ではまだ二十才と七カ月ですので、十分な時間があります。日常がんばっておればそのうちなんとかなるでしょう。

（東京　清水畑　博）

過日のGAP総会はまったくユニークなユーモアにあふれた楽しいプログラムを展開下さり、大変感謝しております。なかでもサボテンを用いた実験は私に大変自信と励みを与えて頂きました。今まではっきりと感覚器官で感じられなかったことが機械によってはっきりと証明されたことは、まったくあらゆる能力開発その他に非常にプラスになると思います。

さて想念観察に関することですが、中岡先生にお借りしたパラマンサ・ヨガナンダ原著のヨガ行者の一生の三十五頁に巡礼の行者の言葉として「私は長年誠実な内省の行を続けてきました。それは神に接近するための非常に苦痛に充ちた道でした。自己凝視、つまり自己の思想に対する容赦なき観察は、身心を痛めつけるほど痛烈なものです。それは如何なるがんこな自我をも粉砕してしまいます。けれども真の自己分析は予言者を生み出すほど正確に作用するものです。自己表現に対する欲望は神や宇宙に対して、自分勝手な解釈を下す権利があると自認する利己主義を生む結果になります」と出ておりました。今まで解析し体験してきた事を皆様に役立てようと思っています。貴家の御多幸を祈りあげます。

（滋賀県　関谷正明）

飛行機の事故や地震と騒々しい師走の入りですが、如何お過しでしょうか。就職いたしましてから早いものであと一ヵ月もしないうちにお正月です。学生のころ京都にいました際には久世先生や大阪支部代表の市川氏、GAPの会員の方々からは大変お

世話になりました。こちら宮崎へ帰りましてからはアダムスキーの哲学等を親しく話し合う友がないのが少し残念ですが、ニューズレターやアダムスキーの書物を通じまして少しずつでもあせらずに理解し、進もうと思っております。もし久保田先生の訳されたアダムスキーの書物に接する機会がなかったらと考えただけでも、それを手にすることのできた僕は幸運であったと思っています。

ニューズレター五十一号のGAP哲学研究講座の1.は非常に興味深く読ませていただきました。次の五十二号を待ち遠しく感じております。また先生の御奉仕に対しましては深謝いたしたい気持ております。先生も色々と御多忙のことと思います。お体には十分お気を付けて下さいませ。

（宮崎県　河野八郎）

久保田先生、御元気でおすごしのことと思います。だいぶ寒くなってきましたが御体を大切にしてください。

先日ニューズレター五十一号がとどきました。怠惰な生活の毎日のくりかえし。そんなときふいに送られてくるニューズレター。これを読むことによってその毎日のくりかえしの中になにかを投げかけてくれる、そんな感じです。前に誌代納入のさいお便りを出したのは四十六年三月、今はもう四十七年の十二月の上旬です。この間気にはしていたのですが、宇宙哲学関係の方にはあまり目もとおさずにもう一年と半年くらいすぎてしまいました。といっても、ただ毎日ぶらぶらと一日寝て一日起きて、そして一週間に一、二度学校へ行ってみるという毎日ではありますが、自分というものについて前よりはほんの少しですがわかりかけてきたような気がします。

高校のGAPに入会したてのころ、先生のところへ人生相談みたいな形で助けを求めたりして御迷惑をおかけしたりしていましたが、そのころの私、というよりそのころから現在までの私は、一言でいってしまえば強迫神経症だったわけです。だいたい中学三年か高校一年くらいから始まり大学に入ってから強迫神経症が固定化してきたことが、大学二、三年のころ心理学関係の本を読んでみて私の症状というものがわかりました。つまりは私のなにかがまちがっているためにこういう形になってあらわれているものなのでしょうが、このためそのころまだ自分の神経症についてはっきりとは自覚していないころ、アダムスキーの生命の科学などを読むと苦痛をおぼえたものです。読んでいると自分の中のなにかが異状な不安感にかられるわけです。今考えるに、これはつまり私が、私のエゴが強力な壁を私の中のまわりにはりめぐらしてなにかを恐れ見まいとしているが、それを生命の科学などを読んでいると、無意識のうちにそのエゴが打ち破られる危険性があるため、エゴも私に関係なく自分のなにかを守ろうとする、つまりなんともいえない不安感をもたせる、そして現状肯定をはかろうとするわけです。

この前なんとなく気分が高揚してというか、妙に心が静まり、私の強迫観念たとえば同じことをくりかえしてやってみるとか、そういうことを不思議にする気にはならなくなり、二時間くらい快適な気持ですごしました。

ところがそのあと机にすわっているとき私は自分が分裂するような感じにとらわれたわけです。このため一時間くらいの間、机にすわって神経を集中して思念し、やっとおさまりました。が、これではまた前のままになってしまったわけです。つまりはまた強迫神経症の私に、心理的にみれば、私見ですが、私のエゴが、毎日なにかから逃避しているエゴが、壁をはりめぐらせて守っているなにかを破られまいとして対抗してきたのでしょう。そのため私に分裂感を感じさせ、かつ不安感を感じさせたのだと思います。ただ、今感じていることはもうこのまま逃避につぐ逃避を続けていてもしかたがないから、やるならとことんやってみようということです。つまり私の強迫観念に私自身対決してみようと思うのです。当然自分が分裂感におそわれるところまでは予測がつきますが、そのあとはいったいどうなるのかわかりません。それで結局そのこわさのためずるずるとのばしという状態ではあるのですが、でも始める必要があると思います。とことん追いつめてみなくてはと思っています。といってもそのずっと前に不安感にかられてまたすぐもとへもどってぬくぬくと逃避した生活にもどる可能性は大です。すべては自分の中のことですから。

私が最近感じていることは、私は胎児だということです。母の胎盤の海の中でふわふわとなにもしないでいられるあたたかい、生活とはいえない生。私は現在すでに二十四才になってしまいましたが、精神的には胎児の生活をしているといえるし、もしくは胎児の生を望んでいるといえるでしょう。無意識のうちにも胎児回帰の願望を小さいころもっていたことをよくおぼえています。でも生まれ出なければならないでしょう。そうでなければもうくさってしまいます。そのとき古い私は死ななくてはならないけれども、私のエゴがいったいなにから私を守ろうと必死になって壁を、強固な壁をめぐらせているのか、その原因を見つける必要を感じています。そこから始まると思うのです。それはおそらく性、女、母親、胎児もしくは赤んぼ、社会などに関連しているものと思われますが—。

ぬくぬくとした胎児の世界からなにもない荒野にただ一人の世界へ、花のない世界へ行かなくてはならないと思います。だから現在、少し前まで私には生きがいがない、生きがいがほしいなどと思っていましたが、今は生きがいがほしいということは考えなくなりました。現在生きがい論がさかんですが、生きがいなど必要のないものだと感じ始めています。ものの本質はもっと別のところに、別の次元にしかないという感じです。こう思い始めたのはヘルマン・ヘッセの「デミアン」を読んでからです。高校のころ読んだときはただ「すごい」としか思わなかったのですが、今読んでみるとなんとなく宇宙哲学への橋わたし的なものを感じます。もちろんこの本はフロイドの精神分析の上にたった小説ではあるのですが—。しかし私はこれをのりこえて宇宙哲学

へ向かいたいと思います。クリシュナムルティーの「生きるための助言」、今これに一番感じています。怠惰に流れるといっても私のエゴがすすんでよろこんで楽しんでそうしているのですが、それにブレーキをかけ、対決をせまらせてくれる、そんな感じです。この「生きるための助言」は全訳をお願いしたいと思います。そのほか久保田先生のGAP哲学研究講座など最近のニューズレターは誌面が充実してたいへんよいと思います。（愛知県　河村啓夫）

先日、日本GAP総会に出席いたしましたが、大変すばらしい充実した一日でした。先生の真剣な、強い信念を含まれた、しかも謙虚な御講演は、より大きな未来への道標と自信を示されました。もう会場全体の雰囲気が広大無辺の生命の息吹きを感じさせ、何か一体感というか、そういう中のリラックスした自由さをおぼえました。

先生の講演された内容には、全然無理なく私たちの生活自体に勇気をつけて下さる根幹を示されました。先生は時たま「日常生活において悩み、不安事、不快感情、疑惑等が起こったら、アダムスキーの著書〃生命の科学〃〃テレパシー〃〃宇宙哲学〃等のどんな個所でもよいから開いて読めば、きっとふたたび宇宙のパワーに目を向けることができる」とおっしゃっておられますが、まったくそのとおりでして、どの個所も深遠であり、しかも勇気を起こさせ、必ず高揚した精神へと招待してくれます。例えば〃テレパシー〃の著書の六十九頁の五行から「どんな小さな事にでも—またどんな大きな事にでもすべて心配することはやめなさい」と書いてありますが、日常生活においてこの〃心配〃という習慣的想念がたぶんに知らず知らずのうちに形成されてしまいがちであるといえます。ことに漠然とした将来に対する不安をもつこともあった私は、何とはなしにこの〃テレパシー〃の著書を開いたらこの個所にあたったわけです。その後、外出する時は常にアダムスキーの著書を一冊携帯しています。

それからGAP月例会、総会にて熱のこもった御講演に接しましてからは、冬になりましても風邪をひきません。（かつて冬期には必ず一回は風邪をひいていました）ですから、いかにアダムスキー哲学の意義が大きいかをどんな所においても痛切に感じる次第であります。

よく月例会等で感じるのですが、先生はよく「私はパイプの役目にすぎない」とおっしゃいます。しかしアダムスキーは先生自身—といったらいいのでしょうか、とにかく一体であるように感ぜられます。つまりアダムスキーという人物は久保田先生でもあるような印象を受けるようです。そして何よりも真理を愛する姿がありありと感ぜられます。

GAP会員の方々の真剣な態度にもすばらしいものがあり、いつも学ぶところがあると言い聞かせている次第です。ですから一ヵ月一回の例会という場がどんなにか貴重であるか、つくづく感じさせられます。〃類は類を呼ぶ〃点を指摘されましたが、同じような想念パターンを持っていらっしゃる方々が集まられるのですから、より意識（宇宙の）が高められる機会が濃くなるでしょう。

さて想念観察についてすばらしい方法をいわれました。GAP発行の想念観察手帳を使用しまして、三十分おきにO印でチェックしていくのですが、やはり今まではただ記録するだけに終っていたようです。それが今回の総会におきまして利己的な感情に対する〃打ち消しの技術〃または〃切り換えの技術〃をすぐさま行なうという方法のポイントを示され、大変ありがたく思っております。O印だけでは不十分かと思いまして、毎日書いています日記にも記録することにしています。十二月の例会からは午後一時から六時までとなっていますが、大いに感謝している次第です。それではこれからもよろしく御指導のほどお願いいたします。（東京　丹野　広）

新年おめでとうございます。今年も世界中のGAPの方々がよりいっそうの団結をされ、万事をうまく切り抜けることができますよう心から願っています。

ニューズレターを送っていただき、本当にありがとうございました。僕は現在浪人ですが、宇宙の賢い人々の言葉を「空飛ぶ円盤同乗記」その他で学びました時から勉強に対する考えも変化してきました。入学試験にパスするための勉強ほど無意味で無価値で有限的なものはありません。僕は今、大学で十分に学ぶことができるための必要条件として〃受験勉強〃というものを押し進めています。ですから大学の〃格差〃というものを全く気にしないようになり、センスマインドの用い方しだいで周囲のすべてが変化するのだということがわかってきました。F・ステックリング氏も言われましたように、貧困という意識はあくまでも個人的な問題でしかなかったのです。

さて最近は常に〃因〃というものを考えるように心がけています。あらゆる生物・無生物で不必要に存在するものは何一つありません。また〃不必要な〃ものでさえ、それが他のものにとって必要なものになっています。偶然の産物など何一つないのです。ですから例えば自分が何か困苦におちいった時でも、それは自分に課された一つの学習なのだと考えることによって、立ち直ることができますし、こんないやな社会に生まれてきたのも自分の精神にまだまだ未熟なものがあるからなのだと思えば、かえって〃苦しみ〃が〃楽しみ〃になってしまい、これも神の祝福なのだ、神はこんな僕にも救いの手をのべてくれているのだと思わず胸がときめく思いがします。これもみな久保田先生の謙虚な献身的活動のおかげです。僕は何てすばらしい時代に生まれてきたのでしょう。アダムスキー氏も表現できぬくらいすばらしい力ですが、心をこめてその著書を翻訳して下さる久保田先生がいらっしゃらなかったら、僕はサタンのドレイとなっていたでしょう。誇張ではなく、一年前の僕は自殺さえも考えていました。

どうかくれぐれもお体をこわされませんよう注意なさって下さい。僕に出来ることならばどんな事でもお手伝いします。僕の力なんてほんとに微小なものですが、何か

のお役に立てれば、こんなに幸福な事はありません。僕が今している活動は、アダムスキー関係の本を買ってきて図書館に寄付することです。読みたくても買えないような人が多いのではないかと思いました。鉛筆で書きましたが、ペンで書くとすごく下手な字になってしまいますので失礼をお許し下さい。

（千葉県　林　陽）

久保田先生そして日本GAPの皆様方、お元気でお過ごしでございましょうか。私は今年（四十八年）の一月、日本GAPの会員に加えさせていただいた者です。GAPニューズレターが私の手許にとどいた今、私はより一層の幸福な気持に包み込まれているような気がしてなりません。本当にありがとうございました。

久保田先生はじめ先輩会員の皆様方の宇宙哲学の実践運動が私を導いて下さった御努力と宇宙の父に深い感謝をささげたいと思います。どうか今後も私を御指導下さい。さよくれぐれもお体を大切にして下さい。さようなら。

（埼玉県　すがはらかずひろ）

お手紙拝見しました。それから「UFOとGAP」のスライドほんとうにありがとうございました。十一月二十八日付で和田正利様からとどきました。文化祭は三十日だと思っていたのですけれども十二月の二日だと後でわかりました。文化祭はいろいろ準備で多忙でした。教室は一部屋とることができず、教室の三分の一を幕でしきって入口からはいったら目がつきやすいようにしました。見る人はいろんな人がいて、チラッと見て行く人、始めから最後まで見て行く人などいろいろでした。映写時間は四十六分では少々長いのではないかと思いましたので、苦労して十五分間に短縮しました。バックミュージックは非常によく、何かジーンと（表現はよくないかもしれないけれど）感じるものがありました。だれが聞いても思うだろうと思いました。

就職はお手紙が来た時にはすでに内定した後でした。やはり前々から行きたいと思っていた宇宙開発事業団に行くことになりました。もし何か御意見でもありましたらぜひお聞かせ下さい。お願いいたします。御健勝をお祈りいたします。

（鹿児島市　大津　泉）

「UFOとGAP」スライドは二十六日午後八時近くに速達で送りました。少々おくれました。まずこのことを報告致します。二十五、二十六日に天文とUFOの両方を映写したのですが、UFOの方を多く見ていたようでした。見た人たちにUFOについてどう考えているかと尋ねてみたところ、関心はあるようですが、肯定的な人はそう多くはないようでした。どうも批判の声の方を受け入れている者が多いようです。以上報告します。

（水戸市　和田正利）

天文ガイドに興味ある記事が載っていましたので同封します。いわゆる月面の異常現象ですが、1.米航空宇宙局でカタログを作った。2.アマチュア天文家のデータは一九二〇—一九七〇年だけである。3.データの五パーセントはいわゆる物理観測である。（付＝スペクトル〈分光器〉、写真〈紫外、可視、赤外線だけをとおすフィルターをかけ、種々の波長のみの写真を撮る〉、光電〈光の強さ、つまり三等星とかマイナス二等星、としらべる〉）以上三点に注目して下さい。日本の天文学者とは科学的態度に雲泥の相違があることが容易にわかります。

テレパシーの実験で、トランプの色あてを行なっていますが、（赤か黒かを）最近約一カ月ぶりに再開したら、なんと正答率が八十パーセントにもなりました。二日続けてであります。以前は時々中止して想念観察をしながらやっと六十—七十パーセントであった。それも七十パーセントを少しでも越えたのは偶然としか言えないもので、データ自体も信頼できなかった。ところが、最近のはmnが七十六パーセント、moが八十二パーセントで、安定して七十六—七十八パーセントは楽にいける自信がつきました。八十パーセントを越えるのはなかなか容易ではありませんでした。というのは、心が一喜一憂するからで、常に無関心（？）を装いながらやるのがまだ十分ではないからです。

体験から言えることは（GAPの実証）1.自分の「黒である」とか「赤である」という判断に絶大な自信をもってすれば％は上昇し、疑問をもてば％は下降する。2.一体感が大事である。3.喜んだり悲しんだりするのはよくない（下降する）。4.体が不潔だと％は下降する。5.やる気のないときにやれば下降する。以上です。

さて最近二、三回の例会に行って気づいたことがありました。つまりほとんどの人が初歩的な物理科学の知識に欠けているということです。日常においてはほとんど必要はありませんが、当会の性質上、入門程度（講談社のブルーバックス）の知識と理解はもっておくべきだと思います。かく言う私も全くの薄学で人におしえるなどはとても無理ですが、特に必要と思われる天文学について、その研究内容や観測の方法を類別に別紙に述べてみました。地球人の天文学が問題にならないことは言うまでもないことですが、時間の測定や地球の極運動に関するデータは信頼できると思います。電波天文学は比較的信頼できるのではないでしょうか。

1.位置天文学（星図の作成、時刻の測定、極運動、特定天体〈スイ星、惑星等〉の位置の測定と予想、恒星の位置変化、その他）

2.天体物理学（星の内部構造〈核物理学、素粒子論〉、恒星大気、星間物質、変光星・新星、銀河系の構造〈大きさ、質量運動〉惑星の気象、内部構造、恒星進化論、宇宙論、距離、星の分類〈B型、O型、中性子星等〉

3.研究対象（太陽、惑星、小惑星、スイ星、流星、月、衛星、星〈ブラックホール、中性子星、パルサー、X線星、白色ワイ星、赤色ワイ星、普通の星、巨星、星のタマゴ（子供？）、ラジオ星、その他変な星〉、重星〈二重星、三重星等〉、変光星、新星、星間物質、地球の位置変化、他の星に惑星があるか否か、生物はいるか、星雲、星雲団、星団、恒星時と標準時と地球の回転運動のズレ、宇宙線、その他。—以下略。

（東京　清水畑　博）

益田工業高校記念祭でスライド映写、大好評

島根県立益田工業高校物理部は昨年十一月十、十一、十二日の三日間にわたる創立十周年記念祭において、物理展会場で日本GAP提供のスライド「UFOとGAP」を映写し、多数の生徒や一般来場者に多大の感銘を与えて大成功をおさめた。以下はその報告である。

（指導責任者は同校物理担当、富久あきら先生〈日本GAP会員〉である）

雪風が十一月二十一日に来石しました。平年より十日も早いそうです。先生にはその後如何おすごしでしょうか。日々多忙のことと思います。先日はスライド「UFOとGAP」を活用させていただき、ありがとうございました。十一月十、十一、十二日と文化祭にて多くの生徒、教師、一般人に見てもらい、各々に感動を与えました。十一月十三日に即刻スライドとテープを和田正利氏に送付しました。もう少し活用したくもありましたが、大学祭に間にあわせねばと思って送りましたから御安心下さい。十一月十九日のGAP総会に近かったらぜひ参加して映画を見たかったのですが残念です。またチャンスがあれば益田の人々にも映画が見られたらと思います。寒くなる候ですがオリオンやスバルがいちだんときらめく冬夜です。生徒たちとできるだけがんばって宇宙を見学してみようと思います。

部の展示で写真のようなイオン・クラフトを工作し、まずまずの成功でした。千葉在住の中学の先生である藤原伸庸先生に知恵を借りて生徒たちが作りました。高圧によって空気をイオン化し、それより出る揚力でもって飛行します。真暗な中ではわずかですが発光します。何分1gの質量ですゆえ簡単なものです。10gにでもして飛行するような原理が見い出せれば大変興味深い飛行体になるわけですが、今のところ1g以上ではTVの高圧1万5千V程度のものでは飛行しないようです。寒さがきびしくなる日々、十分元気でGAP活動を成功させて下さい。またスライド等ありましたらよろしくお願いします。会員の皆様によろしく。（富久あきら）

—以下は同校物理部々員諸君の報告—

UFOスライドはとてもすばらしかったです。私はUFO自体に今でも多くの疑問をもっています。しかしそれだけに興味がもてます。これからもすばらしいスライドや情報があったら送ってください。（電気科一年　斎藤博美）

UFOについてまだまだ疑問が多い。これからも資料をお送りください。また来年こそはぜひ本校に来てご指導してくださるようお願い申しあげます。（機械科一年　藤川博之）

たいへん興味をもって拝見させていただきました。私達は新鮮なスライド、8ミリフィルムが見たくてたまりません。できましたら新しいものを拝見させて下さい。どうぞよろしくお願いいたします。（電気科二年　河口満好）

二、三年前から円盤について興味を持ち始めて、このUFOのスライドを見て大変勉強になり、また興味も一段と大きくなりました。（機械科一年　伏谷忠義）

いまだかつてUFOの正体を見きわめた者はいない。だから未確認飛行物体とよばれている。このスライドを見て数々の人々が円盤を目撃していることから何かがいることはたしかだと思う。しかしそれが何であるかはだれも知らない。それとイオンクラフトが実際に関係があるかどうかはわからない。とにかく円盤説を否定しない。（工業化学科　高橋　滋）

とても貴重なスライドをみせていただきとても光栄に思っています。何か感動するものを覚えました。これからももっともっとUFOに関する活動にますます貢献して下さい。欲をいうと科学的に追求し、人物の履歴についてもっと説明して下さい。（工業化学科一年　中村正則）

UFOのスライドを拝見させてもらいましてありがとうございました。今なおわからない円盤の正体を少しでもわかることをスライドを見ながら考えました。スライド中に先生の説明もあり、頭の悪いぼくたちにも興味をもつことができました。次の機会がありましたらまたスライドを送ってください。（機械科一年　岡田忠良）

わが県立益田工業高校の十周年記念祭にあたって物理部が「物理展」として科学実験、天体などを一般に公開した際に天体部門で先生から送ってもらったUFOのスライドを公開したところ、大反響を呼び、そんなこともありまして「物理展」は大成功をおさめました。成功した原因はスライド「UFOとGAP」が大きな役目を果したのではないかと思い深く感謝しています。さて私がスライドを見て感じたことは、スライド自体はたいへん興味を持てたのですが、もう少し科学的な説明を加えていただけたらと思います。来年も先生のお力を加えてもらえたら幸いであります。（物理部部長　小浜一輝）

右端＝小浜君　左端＝富久先生

UFOスライド、各地の学校で映写、好評

日本GAP製作スライド「UFOとGAP」（バックグラウンド・ミュージック入り解説録音テープ付き）は各地の学校で映写されて大きな反響を起こしているが、四十七年度においては島根県立益田工業高校以外に茨城大学、九州大学、多摩高校（東京）、芝学園高校（東京）、鹿児島工業高校等で映写されて多大の成果をおさめた。ご尽力いただいた責任者は、富久あきら（益田）、和田正利（茨城）、大津　泉（鹿児島）、工藤宏明（九州）、北島　弘（多摩）、野川雅行（芝）の各氏である。大体に各校とも秋の学園祭で使用する場合が多く、そのためスライドをタライまわしにした有様で、間に合わないために使用を断念した学校が他に数校あった。四十八年度は更に内容を厳選したすばらしいスライドを製作する予定なので、早目に照会されたい。なお日本GAPは「UFOとGAP」以外にも多数のスライドを製作保有しているので（録音テープなし。解説書付き）、希望者は1.映写日2.学校名またはグループ名3.会場4.責任者名を記入の上申し込まれたい。無料貸出しする。

以下は二月十日における多摩高校のスライド映写の結果である。（報告者＝北島弘氏）

反響＝◎円盤そのものの写真が少ない。◎国際的規模で研究されていることがわかった。◎アダムスキーの証拠が少なすぎる。◎写真はトリックみたいな気もする。◎クランプの図面からしてみると本物にちがいない。◎なぜアダムスキーだけが宇宙人に会って話ができたか。◎とてもよかった。

次は芝学園高校の映写状況。（報告者は野川雅行氏）二月二十四日同校社会科教室にて実施。

私達同好者一同はUFOについての新たな興味と宇宙の神秘と可能性、それにGAPというUFO研究団体として世界的な研究団体の存在を知ってもらう意味で公開しました。何しろ急に思いたって試験も近いので大変急いだものですから、充分な宣伝も出来ないままに公開の日を迎えてしまったのです。（ハッキリ言えば宣伝したのは当日だけです）しかし私が映写機を先生のところへ借りに行って社会科教室へ行ってみますと、驚いたことにもう二十名前後の中学生が並んでいたのです。説明用のワイヤレスマイクを調整して公開しようとした時には何と四十名にもなっていました。このため教室が満員。先生や我々同好者もふくめますと五十名になりました。フィルムの構成は、まず我々の所有するアポロの資料（万博のもの）を三枚ばかり映写して、その間にGAPの簡単な説明と、UFOや月に関するナゾ、それにアダムスキー氏の報告と各国無人探査機との矛盾を説明し、「UFOとGAP」の映写に入りました。スライドが終わって入場者に感想を聞いたところ、入場者四十名がすべて「大変すばらしい。今日ここへ見に来てよかった」という返事でした。またすべての人がUFOに大変興味があるとのことで、アダムスキー問題についてもよく知っている人が大変多かったようです。またあとまで残って我々に質問に来る熱心な人も十名前後いましたし、何といっても映写中全員が熱心に見てくれた事が我々を大変感激させました。

担当責任者は野川雅行、担当先生は英語科の山本先生でした。

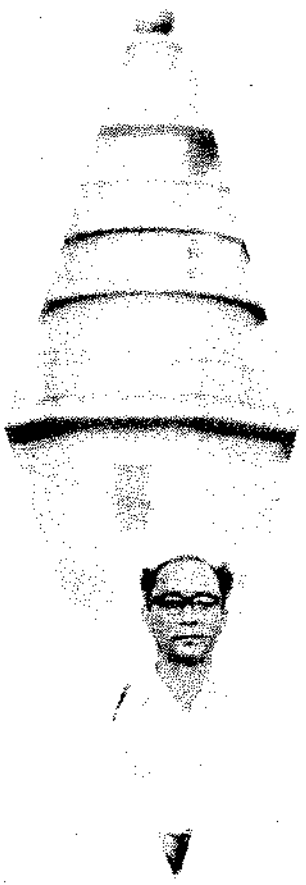
<表紙写真>
三浦半島の円盤

三浦半島へ出かけたのは昨年の九月十七月のことである。当日はもともと円盤観測が目的ではなく、途中で所用をすませたあと時間があまったので、ついでに行ってみようと思いたったのである。しかし当日朝から今日はカメラを携行する方がよいという衝動にかられて、カメラバッグに愛用のカメラ二台と撮影用器材一式をつめ込んで家を出た。天気は上々で快適なドライブである。

剣崎灯台へ到着したのは午後五時近くであった。十六日の台風二十号の余波で風が強く、観光客はほとんどいない。灯台横の坂道を登っている途中、同行のA君が叫んだ。「円盤だ！」指さす方向を見ると白銀色の円盤が波状運動をしながら飛んでいる。あわててカメラをバッグから取り出そうとしたが間に合わない。せまい台地に上がってからしばらくして今度は南方海上へ向けて直線に円盤が飛んで行くのをB君が発見して一同歓声をあげる。これは落ち着いて撮影できた。五時半頃、富士山方面に母船とおぼしきものが出現したあと、折からの夕焼けで富士山上空にたなびく雲がすごく美しい。よしこれを撮ろうとカメラを向けて続きに三枚シャッターを切り、四枚目のファインダーをのぞいていると、一瞬黒い物体がファインダー視野内に飛び込んだ。

瞬間的なことなので気にもせず、続いてもう一枚撮影した。しかし現像してみると四枚目に写っているのは黒い円盤であった。円盤の周囲にボーッとモヤのような放射状のものが見えるが、これはフォースフィールドと思われる。なおこの写真は去る一月十六日の夜、日本テレビの「火曜スペシャル」番組で斎藤雄久氏撮影の円盤写真その他とともに全国へ放映された。（久保田）

データ　ニコンフォトミックFTN、ニッコール二〇〇ミリF4、フィルター＝ニコンY48、シボリF5.6、1/250秒、ネオパンSS。ミクロファイン。



灯台前の編者

昭和47年度日本GAP総会、盛況

去る十一月十九日、池袋豊島区民センターにおいて昭和四十七年度日本GAP総会が開催された。当日は清澄な秋の一日であり、参加者数も百名を超え、年々内容が充実してゆく頼もしさが感じられる。

会場には斎藤雄久氏が数年前に撮影された一連の円盤写真が整然と展示されてあり、熱心な多くの人々はしばらく足を止めていた。

午前十時、市川宏大阪支部代表の挨拶となる。市川氏は大阪支部発足以来三年になるが少しずつ進歩の跡が見られると現況を報告され、ついで御自身の想念観察の記録を発表された。最近は手帳と数取り器の両方を使用されているそうで、夢の記録と日々の反省日記ともいうべき記録には市川氏の全ぼうが赤裸々に現われており、その幼児のような純粋さには全く頭の下がる思いである。市川氏は想念観察について「だれもが実行できて、だれもが成功し得る唯一の方法であろう」と述べられ、想念観察とセンスマインドのコントロールの重要性を強調された。氏のセンスマインド抑制の努力は大変なものである。

会場ではせきばらいひとつする人もなく、終始水を打ったように静かであった。

続いて久保田八郎代表の挨拶・講演となる。代表は、宇宙哲学は単なる観念の遊びにとどまるたぐいのものではなく、生活に密着した実践哲学であることを強調され、宇宙の諸法則について解説された。類は類を呼ぶということわざは真実であって、同じような想念パタンの人々が集まるので、なるべく高次な想念を持ち続けるのがよいということや、想念観察については単にプラスの想念マイナスの想念をチェックするだけでは十分ではなく、マイナスの想念が起こったらただちにそれを宇宙的想念によって消滅させるという打消しの技術が重要で、これがキイであるとのこと。想念観察の実行を奨励したアダムスキー氏の哲学は最高にすばらしく他に例をみない、と代表。またテレパシーは他人の心を読み取るというような見せ物ではなく、魂の目的を遂行するため奉仕をするための最良の手段だそうで、テレパシー練習の必要性を述べられた。代表によれば、人間の行動の動機には自由意志的なもの、前生との因果関係、偶発的なものの三通りあり、行動の主体は内部からわき起こる印象によるべきで、そのためにはセンスマインドを意識のしもべにせよとのこと。印象に従った自由意志的行動こそ現在の一瞬からより良き未来へ我々を導くのである。つまりアタマの先だけで考えないで、内部の意識からもたらされる指導に従うのである。また人間は意識、心（センスマインド）、肉体の三つが完全なバランスを保っていなければならず、従って肉体を軽視する極端な精神主義は誤りで、この三つが一体化してこそ三位一体である。また代表は生命の連続についても話され、兄弟姉妹、親友などは大体に前生からの深い関連がある場合が多いという。しかし単なる好奇心で前生を知ろうとするのは本人にとってかえってマイナスであり、結局過去に執着しないで現在の一瞬を生かすことが重要であると説かれた。お話は静寂な会場内に響きわたり、聞く人の胸を打つように思われる。また「同乗記」にもある例を引用して、スペース・ブラザーズはしかつめらしい顔をした人ではなくユーモアを好むように思われるのであるが、このユーモアとウィットが我々にも必要であって、これは人間の進化と幸福に不可欠であるとのこと。

昼の休憩後一時より質疑応答・座談会となる。ケーキとお茶でノドをうるおしながら質問が出される。しかし代表に対する質問の多くはたいして重要でないものであり、特に午後になって来たある質問者などは攻撃的な質問をくどくどと発したあげく、代表にむかって「もっとまじめにやれ！」と大声でどなりつけたのには驚かされた。しかもこれが同じアダムスキー問題を扱っているあるグループの学生リーダーなのである。しかし市川司会者や他の会員からたしなめられたこの感情的な質問者はまもなく急に席を立って出て行ったため、会場はもとの静かな一体感に満ちた雰囲気にもどった。しつこい質問にも終始冷静な態度で応答された代表は非常な忍耐力の持主である。

続いて橋本健博士によるサボテンの実験となる。博士の開発になる電子装置をサボテンにつないで電流を流し、サボテンが人の想念に感応すると針が動いてブーンと音が出る仕掛になっている。来場者の中から数名の希望者をつのり、実験を試みた結果は上々であった。サボテンに呼びかける実験者のほとんどに対して反応が現われ、橋本先生もさすがは日本GAPの集まりだとしごく御満悦の言葉を述べられた。

サボテンの実験も大成功に終わり、すぐに記念撮影。続いて円盤実写映画の上映となる。ロドファー夫人の画面いっぱいの金星型円盤、アダムスキー撮影の木の葉運動をする二機の円盤、イギリスでの伸び縮みする飛行雲を吐いて飛ぶ円盤、そして富士山で斎藤雄久氏が撮影された雲の中を出入りする黄金色の円盤等、すばらしい迫力あるシーンが展開して雰囲気は最高潮に達した。

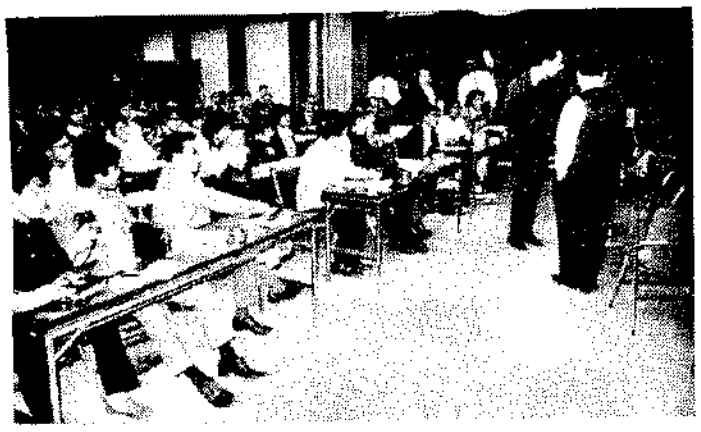
この映画を最後に大会は無事終了して幕を閉じた。関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

（中山正史記）

総会々場風景

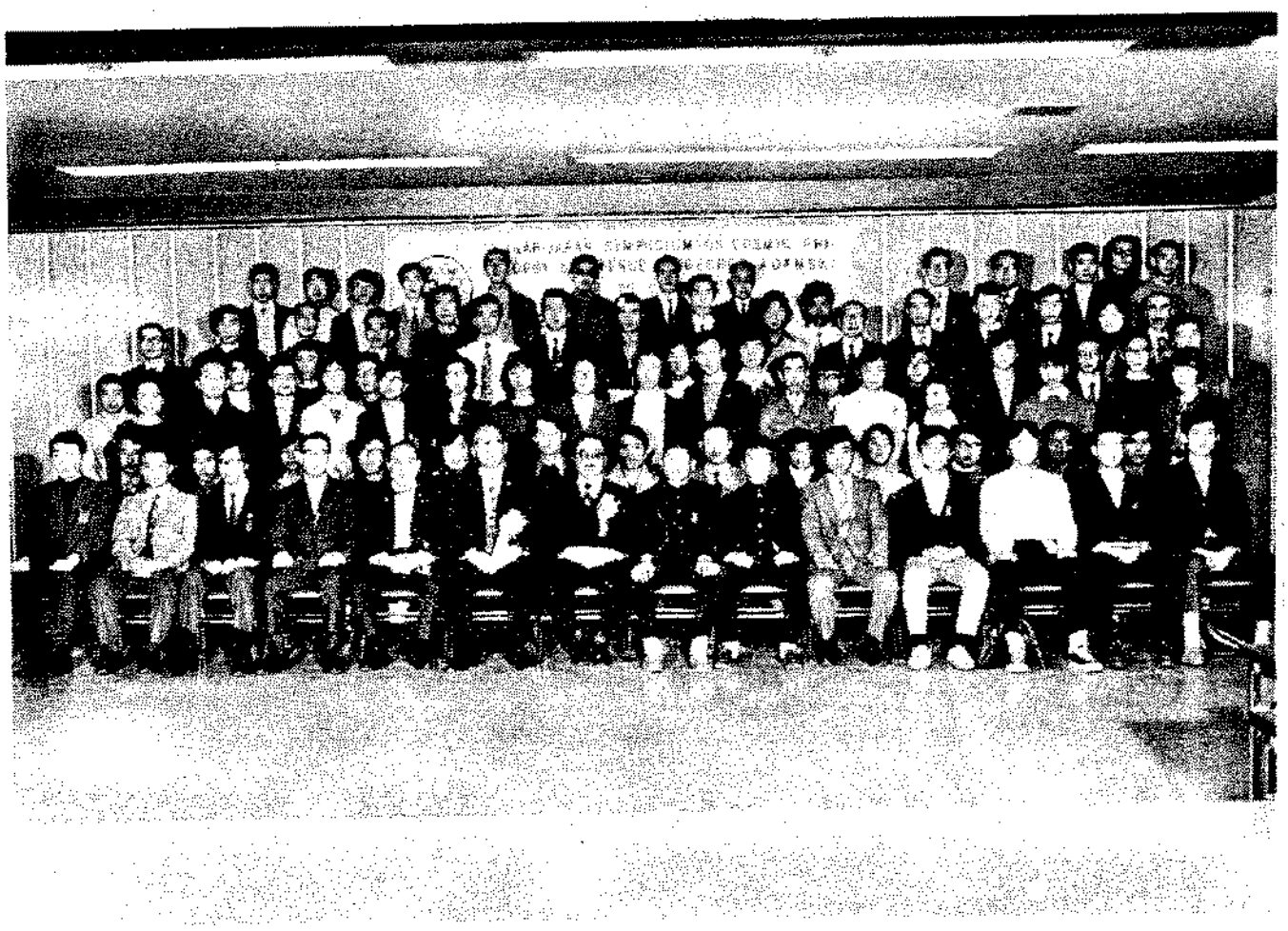
実演中の橋本博士

受　付



サボテンに呼びかける実験者

久保田代表の講演



記念撮影

71回に及ぶ大阪支部例会

日本GAP大阪支部は市川宏代表のリードのもとに発足以来三年余になるが、同支部の月例研究会は今年二月十八日の例会をもって通算七十一回目に達した。これは市川代表の並々ならぬ熱意と努力によるものであり、また常連各位の多大なご協力のたまものである。大阪支部は月例研究会を毎月第一及び第三日曜日の二回開催し、「宇宙哲学」「生命の科学」等の輪読研究、討論、スライド映写等を実施しているが、昨年よりはテレパシーの練習を実行して大きな成果をあげている。これはESPカードを応用して順番に発信者をきめ、他の全員がそれを受信するという方法をとるものであるが、その成績結果は驚くほど綿密に計算され記録されている。紙面の都合により今ここにその全部を再録できないが、ちなみに二月十八日の例会におけるテレパシー練習の結果は下表のとおりである。もちろんこの成績は各自の絶対的な能力値ではなく、実験日の気分によって多少の変化があることを知る必要がある。小人数の会合ではあるけれども、科学的方法にもとづいたテレパシー練習を定期的に行なっているグループは日本GAP大阪支部くらいのものであろう。成績如何は別として、強固な信念のもとにテレパシックな感受力の開発を目指してたゆみなく練習を続ける同支部は時代の先端を行っていると称しても過言ではあるまい。この真剣な実験はいつか大きな成果をあげるだろう。関西方面の会員はぜひ参加されたい。

第六回テレパシー練習成績表
昭和四十八年二月十八日（尼崎）

1回	2	3	4	5	6	7	8	9	10		計	適中率
—	2	2	0	2	—	4	3	3	1	市川	17	21,3%
／	1	2	3	—	3	1	1	3	4	守田	18	22,5
1	2	—	3	1	1	0	1	3	1	矢野	13	14,4
3	0	2	—	4	0	4	2	—	1	秋田	16	20,0
0	—	1	3	2	3	0	4	2	2	井上	17	18,9
3	4	0	0	3	0	3	—	4	0	波田野	17	18,9
1	4	2	1	0	3	—	3	1	3	川池	18	20,0
2	1	0	1	3	2	2	1	4	—	前原	16	17,8
3	3	2	1	2	1	0	0	3	4	沖	19	19,0
											計	
13	17	11	12	17	13	14	15	23	16		151	19,1%
18,1	21,3	13,8	15,0	21,3	16,3	17,5	18,8	28,8	20,0			

日本GAP月例研究会

日本GAPは左記のとおり東京と大阪支部の二個所で月例研究会を開催して会員の精神的向上と宇宙的哲学の探求及びUFOに関する知識の吸収の場を提供しております。特にUFO関係のスライド映写も実施して貴重な資料を公開しています。都府内外近郊の方はぜひご参加下さい。

大阪支部例会

1. 日時　毎月第一、第三日曜日の二回開催。午後一時より四時まで。
2. 会場　兵庫県尼崎市　尼崎産業郷土会館（電話〇六—四八八—二三五一）阪神大物下車。
3. 会費　いずれも百円。
4. 携行品　テキストとして第一日曜は「生命の科学」第三日曜は「宇宙哲学」を持参のこと。

東京例会

1. 日時　毎月第一日曜日、午後一時より六時まで。ただし一月だけは第二日曜日。
2. 会場　豊島区民センター（電話九八四—七六〇一）国電池袋駅東口下車。三越デパートの裏手。徒歩三分。
4. 会費　二百円。茶菓が出る。
5. 携行品　テキストとして「生命の科学」を持参のこと。

アダムスキー哲学三大名著　絶賛発売中！

スペースブラザーズから伝えられた宇宙的思惟法と宇宙的な生き方とを三部に分けて詳述。GAP会員必携の書。注文は各出版元へ直接にどうぞ。

G・アダムスキー　久保田八郎訳

宇宙哲学

¥350 〒70

東京都新宿区納戸町33 たま出版　振替東京94804

G・アダムスキー　久保田八郎訳

テレパシー

¥350 〒70

G・アダムスキー　久保田八郎訳

生命の科学

¥420 〒70

出た！アダムスキーの弟子でありコンタクティーでもあったフレッド・ステックリングのすばらしい体験記と哲学！　特に幼児教育について重要な示唆を与える。宇宙問題探求者必読の書！

F・ステックリング　久保田八郎訳

なぜ空飛ぶ円盤は来るのか

¥550 〒85

東京都文京区白山1−29−12 文久書林　振替東京2521

オーソン肖像画

ジョージ・アダムスキーが砂漠で最初にコンタクトした金星人は後に「同乗記」でオーソンという名で出てくるが、これをア氏の記憶にもとづいて画家に描かせた肖像画をカラー写真にしたものを日本GAPでは月例研究会で頒布してきた。残部が少々あるので希望者は直接本部宛注文されたい。スペース・ブラザーズとの一体化を図る上で重要な資料となるものである。

◎キャビネ判（11.5×16.5c）¥300 〒40

◎名刺判（5.5×8.2c）¥150 〒20

本誌旧号

本誌バックナンバー（旧号）は次のものが残っています。発行部数僅少につき残部もわずかしかありません。未入手の方は早目にご注文下さい。送料は不要。切手代用もOK。

49号・50号・51号　各¥250

想念観察手帳

想念印象の観察はアダムスキー哲学の中心となる実践法で、超能力開発、宇宙的哲人になるための不可欠の方法です。日本GAP特製の手帳は記入が容易で携帯に便利。飛躍的な向上が期待できる。会員必携の手帳。

¥150 〒25　送料は2冊55円・3冊70円・4冊85円　5冊115円

上記2点のみは直接日本GAPへご注文を。

ポスター

意識と心と人間と

美術出版社発行の月刊誌「美術手帖」4月号付録としてポスターが添付された。これは文章構成を編者が担当して「宇宙哲学」「生命の科学」等から重要な部分を抜粋の上、読み易く改編し、更に編者の文章も加えてア氏の哲学を要約したコピーに宇宙的感覚による絵画を組合わせたもの。このすばらしい大ポスターをぜひ自室の壁に飾られたい。

デザイン　横尾忠則　73×103c

出版社か書店へどうぞ。

美術手帖　4月号

3月17日全国一斉発売

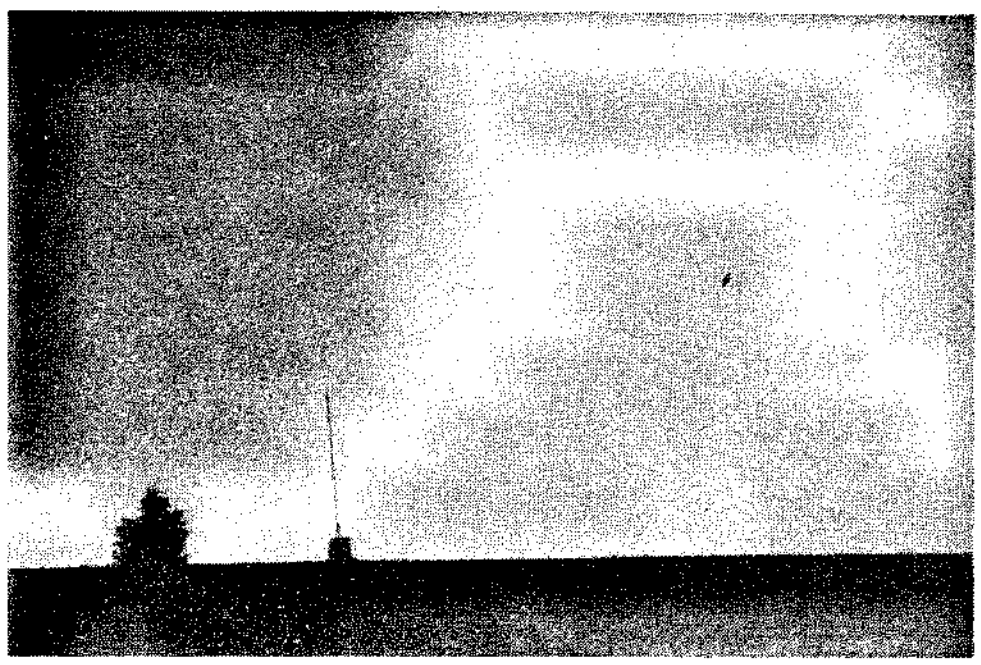
¥460　〒50

東京都新宿区市谷本村町15 美術出版社

振替東京166700

〈香川県のUFO〉

左の写真は香川県琴平町に住む日本GAP会員武田雄児氏が昨年十月に撮影されたUFO。シャッタースピードが遅いため光体が直線状に写っている。（琴平町にて）



編集後記

◎またも発行がひどく遅れて申訳ありません。山積する郵便物の処理、資料蒐集整理、翻訳編集、タイプ打ちによるオフセット版下製作等、依然としてワンマン・オペレーション（たった一人でやる仕事）でありますために、どうしても時間不足におちいり、発行が遅延いたしました。深くお詫びいたします。しかし本号は五十二頁としましたので内容は充実したと思います。これは本誌始まって以来の最多頁数です。

◎「ホワイトサンズ事件」は好評裏に完結しました。次号からはまた新たにノンフィクションの興味深い記事を連載するよう資料を検討中です。

◎「生きるための助言」はまだ当分完結しませんが、今後も連載を続けるかどうかを考慮中です。読者によってはこの記事が最もよいといわれる方もあり、むげに中止するわけにもゆきません。これまでのクリシュナムルティー哲学を通読されれば、独特な一貫した哲理が含まれていることにお気づきのことと思います。つまり人間の知覚力を発達させて真自我に目覚めることの重要性を説いているわけで、単なる観念論ではありません。ア氏の哲学と一脈通じるものがあります。最近はクリシュナムルティーの別著「ライフ・アヘッド」と「ユー・アー・ザ・ワールド」の二点を二人の方からご寄贈いただきました。いずれもすばらしい内容で、いずれ何らかの方法で紹介するつもりです。

◎改訳「空飛ぶ円盤同乗記」はちょうど半分ほど連載が進行しました。訳文は徹底的に吟味してありますので、読みやすい完ぺきな訳文になったものと思います。原書をあらためて精読してみますと、今更のようにこの書の内容のすばらしさと重要さを感じます。円盤・ブラザーズ問題の知識を得るのに基本的テキストになりますから、改訳を反覆熟読されるとよいでしょう。この原書「インサイド・ザ・スペース・シップス」は現在もなお海外の出版社から出ていますが、装丁、印刷、紙質等で最上のものはロンドンのネヴィル・スピアマン社発行のもので、写真と図版は全部収録してあります。原書入手をご希望の方は編者宛ご連絡下さい。注文法をお知らせします。（A5判、厚手表紙、カバー付き、邦貨約千五百円）

◎新聞、雑誌等に出るUFOや宇宙科学に関する記事、写真等の切抜きを資料として集めています。ご協力下されば幸いです。

◎御寄付の御礼。（昨年十月二十七日以降二月末日まで。敬称略）清水畑博（東京）便箋紙一千枚、宮内温夫（在米）一万五千円、関谷正明（滋賀県）五千円、松田春男（北海道）三千円、安田正人（鹿児島）七千円、塩谷勉（福岡）二千円、匿名氏（宮崎）二万円、中岡桂園（滋賀県）一千四百円、馬場礼二郎（福岡）二千円、匿名氏（東京）一万円、林陽（千葉県）一千円と切手多数、秋田誠子（大阪）一万五千円

（久）

GAPニューズレター！ 五二号
1973・3
編集発行人 久保田八郎
発行所 日本GAP
東京都江戸川区篠崎六―二三―一
振替東京三五九一二久保田名儀
頒価二五〇円・送料七〇円